

Creative City
International
Conference
2009 in
Yokohama

横浜クリエイティブシティ
国際会議 2009

9|4_金→6_日



公式記録

Official Proceedings



主催者挨拶

福原 義春(横浜クリエイティブシティ国際会議2009実行委員会委員長、
創造都市横浜推進協議会会長、社団法人企業メセナ協議会会長、
資生堂名誉会長)

2009年9月4日[金] 13:30~13:45
関内ホール[大ホール]



福原義春
FUKUHARA yoshiharu

創造都市横浜推進協議会会長
社団法人企業メセナ協議会会長
資生堂名誉会長

本日、横浜クリエイティブシティ国際会議2009に国内外の都市から非常に多数の参加者をお迎えいたしまして、このような会議を開くことができ、大変うれしく思っております。まず初めに、横浜クリエイティブシティ国際会議2009実行委員会委員長として、本会議にご出席いただきました皆さまにお礼を申し上げます。

今日、世界の都市を取り巻く環境は、大変大きく変わっております。この環境の中で新たな都市づくりを進めるためには、まず社会システムとその変革が求められているということは、皆さんご承知のとおりです。一方で、都市の新しい在り方として、また、都市再生の手法としては、創造都市の考え方が、世界的な潮流になってきているわけです。この背景には、創造都市に関する次のような考え方がございます。

一つは、人間の創造力は、不安や困難、環境、平和というようなグローバルな課題に立ち向かうための非常に大きな力になっているということです。二つ目に、地球環境の保全などの都市課題を解決するには、この創造力が必要である。三つ目に、都市の活性化、国際的な競争には、経済だけではなく、文化・芸術の力が非常に大きい。四つ目に、都市の新しい価値観や魅力の創出を行うことで、都市のブランドが形成される。これらのクリエイティブシティの考え方からしても、本国際会議のテーマ「創造性が都市を変える」は、現在の状況に本当にぴったりするものであると考えています。

折しも、経済だけが世界を支える力ではないということは誰も知っているわけで、それでは、経済だけでない柱というのは一体何かがあるかというようなことになって、そこに人間の力、そして文化の力が重要になってくるということ、すべての人が認識している状況になったと、私は理解しております。

日本国、あるいは日本国外の世界中の都市において、クリエイティブシティを活かしたまちづくりが進められていることもご存じのとおりです。ヨーロッパでは、古くからボローニャ、あるいはビルバオ、ナントなど、多くの都市が先駆的取組を進めております。近年では、アジアの多くの都市も創造都市を標榜して、それぞれの生き方、それぞれの取組を次第に進めているということもご承知のとおりです。

その手法は幾つもありますが、一つには、その都市の持っている文化資源、あるいはその都市の持っている特長を生かしたまちづくり。そして、都市の持つ歴史、あるいは空間、資源等によってその状況が変わってくるわけですが、何よりも大きな前提は、人間の創造性が都市の未来を拓くということに尽きると思います。その目標は、市民のクリエイティブシティが高まることによって、その市民が住む都市の生活を豊かで魅力あるものにすることができるということになってくると思います。

ここ横浜は、クリエイティブシティの取組を、日本の中でもかなり先駆的に進めてきた都市です。市民、あるいはNPO、地域と協働して、四つの目標を掲げて取組を進めてきた都市です。ご紹介いたしますと、1番目には、アーティストあるいはクリエイターが住みたくするような創造環境の実現です。2番目には、創造的な産業の集積による経済活性化。3番目には、魅力ある地域資源の活用。4番目には、市民が主導する文化・芸術都市づくり、この四つです。それぞれ目標を掲げて、それぞれかなり進んできたのが現状であると私は考えています。推進体制としては、私が会長を務めさせていただいております、公民協働の推進組織であります創造都市横浜推進協議会や、あるいは企業ネットワークを設置しているわけです。

この国際会議では、開催地横浜の、先ほど申し上げましたような幾つもの取組をはじめ、さまざまな国内外の諸都市と参加者の取組と、それぞれの課題を出席者全員が共有するとともに、創造都市の次なる方向性と戦略を議論しようというものです。また、参加者間でも、今後の取組提案を行うことによって、都市の個性に応じた、新たな創造都市づくりの手法につなげていくことができると考えております。

今日から3日間の国際会議ですが、国内外20余りの都市から、約50人のスピーカーのほか、市民、NPO、教育関係者、そして行政関係者というように、多様なセグメントの方々にご参加いただくことができました。会議における活発な議論とともに、今回結成されたネットワークを継続・発展させることによって、世界中で創造性を活かした、まちづくりがさらに一歩進むことを期待して、私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく申し上げます。

9|3
歓迎レセプション
横浜みなとみらいホール

Welcome Party
Yokohama Minato Mirai Hall

会議概要

General outlines of the Conference

日程 2009年9月4日 [金]～9月6日 [日]

会場 関内ホール | 横浜市開港記念会館

ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター

主催 横浜クリエイティブシティ国際会議2009 実行委員会

横浜市 | 公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団

創造都市横浜推進協議会

共催 BRITISH COUNCIL

後援 文化庁 | 神奈川県 | 横浜放送局 | 神奈川新聞社

企業メセナ協議会 | JAPAN FOUNDATION | +vkc

東京藝術大学 | 東京大学大学院新領域創成科学研究科

横浜国立大学 | 横浜市立大学 | 横浜商工会議所

助成 公益信託 タカシマヤ文化基金 | 財団法人 野村国際文化財団

横浜クリエイティブシティ国際会議2009 実行委員会委員

委員長

福原 義春 創造都市横浜推進協議会 会長

副委員長

近澤 弘明 創造都市横浜企業ネットワーク 代表

副委員長

北沢 猛 東京大学教授 [大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻長]

副委員長

野田 由美子 横浜市 副市長

委員

吉崎 哲平 NHK横浜放送局 局長

水田 秀子 神奈川県 県民部長

小北 秀雄 神奈川新聞社 営業局次長兼開港150周年記念事業副本部長

相馬 千秋 急な坂スタジオ 代表

坂戸 勝 国際交流基金 理事

加藤 普 総合研究開発機構 専務理事

吉本 光宏 創造都市横浜推進委員会 委員長

中村 行宏 株式会社テレビ神奈川 営業局長兼事業局長

藤幡 正樹 東京藝術大学教授 大学院メディア映像研究科長

池田 修 BankART 1929 代表

湯浅 真奈美 プリティッシュ・カウンシル アーツ・マネージャー

大木 高仁 文化庁 政策課長

北山 恒 横浜国立大学 大学院Y-GSA教授

加藤 種男 公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 専務理事

鈴木 伸治 横浜市立大学 ヨコハマ起業戦略コース准教授

監事

成田 憲一 財団法人 横浜観光コンベンション・ビューロー 専務理事

監事

宇野 巧一 横浜商工会議所 理事・経済政策部長

[敬称略 | 役員を除き、団体等名称五十音順 | 9月1日時点]

Supported by

intloop

Asahi

日本旅行

Daito

Chikazawa

横浜クリエイティブシティ国際会議2009 企画委員会委員

委員長

鈴木 伸治 横浜市立大学 ヨコハマ起業戦略コース准教授

副委員長

吉本 光宏 創造都市横浜推進委員会 委員長

委員

松尾 子水樹 STスポット横浜 理事

相馬 千秋 急な坂スタジオ 代表

金 正勲 慶應義塾大学 政策・メディア研究科 准教授

菅野 幸子 国際交流基金 情報センタープログラム・コーディネーター

岡部 友彦 コトラボ合同会社 代表

櫻井 淳 櫻井淳計画工房 代表取締役

橘田 洋子 シトラス 主宰

飯笹 佐代子 総合研究開発機構 リサーチフェロー

白土 謙二 電通 執行役員

北沢 猛 東京大学教授 [大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻長]

紫牟田 伸子 日本デザインセンター プロデュース室チーフプロデューサー

池田 修 BankART 1929 代表

湯浅 真奈美 プリティッシュ・カウンシル アーツ・マネージャー

岸本 哲哉 文化庁 政策課企画調整官 文化広報・地域連携室長 文化ボランティア専門官

北山 恒 横浜国立大学 大学院Y-GSA教授

岡崎 三奈 財団法人 横浜観光コンベンション・ビューロー 経営部担当部長

天野 太郎 公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 横浜美術館主席芸員

菅原 幸子 公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 アーツコミッション・ヨコハマ・マネージャー

松田 朋春 ワールドアートセンター チーフプランナー

鈴木 和宏 都市経営局 政策課担当課長

中野 成紀 市民活力推進局 文化振興課長

市川 悦雄 経済観光局 経営・創業支援課長

若林 和彦 経済観光局 集客プロモーション担当課長

中野 創 都市整備局 都市デザイン室長

浅見 昭雄 開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課担当課長

鍋田 傑 開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課担当課長

仲原 正治 開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課担当課長

日詰 雄治 開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課担当課長

松村 岳利 開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課長

[敬称略 | 行政を除き、団体等名称五十音順 | 9月1日時点]

目次

主催者挨拶	1
会議概要	2

基調講演

パネル
ディスカッション
1

会議1日目	4
基調講演	6
パネルディスカッション 1	18

9|4

創造性が都市を変える
社会システムとその変革

会議2日目	
分科会セッション I	40
分科会セッション II	98
分科会セッション III	152

9|5

クリエイティビティと市民・アート
縮退の時代の都市戦略とクリエイティビティ
クリエイティビティと都市ビジョン

分科会
I

分科会
II

会議3日目	206
パネルディスカッション 2	208
全体会	230
	250

9|6

首長会議 | 都市の未来を語る
分科会報告
横浜宣言

分科会
III

パネル
ディスカッション
2

全体会

創造性が都市を変える Creativity moves the City
Creative City International Conference 2009 in Yokohama
横浜クリエイティブシティ国際会議 2009
主催：横浜クリエイティブシティ国際会議2009実行委員会 横浜：公益財団法人 横浜市民文化振興財団 創造都市横浜推進協議会



13

14

15

16

17

18

19

20



主催者挨拶
13:30～13:45

基調講演
13:45～15:00

創造性が都市を変える



パネルディスカッション
1

15:30～18:00

社会システムとその変革



9 | 4

金曜日

関内ホール [大ホール]

基調講演

パネル
ディスカッション
1

参加者交流会

18:30～20:00

**ヨコハマ・クリエイティブ
シティ・センター** [1Fホール]



創造性が都市を変える

ピーター・ホール(ロンドン大学バートレット校教授)

ご紹介どうもありがとうございます。はじめに、今回私をご招待くださった会議主催者の皆さまに心から感謝申し上げたいと存じます。お仲間のゲストの皆さまも同じお気持ちだろうと思います。

さて、これから私が行う講演についてですが、来日前に準備したもので、今現在、横浜で起こっていることには言及しておりません。主催者の方の案内で、いろいろな所を視察させていただきましたが、そういうことは私の講演には入っていないということです。より具体的なお話は、後ほどのパネルディスカッションでさせていただければと思います。

まず、ある問題提起から始めたいと思います。イギリスでも、日本でも、さかんに議論されている問題ですから、皆さんもご存知のことだと思います。1年半ほど前から始まった今日の景気後退によって、いったいどの国の経済が最も打撃を受けたのかという問題です。2か月前の『ファイナンシャル・タイムズ』にも、この問題を論じる記事が掲載されました。興味深いことに、その記事によると、実際には世界の主要な金融都市であるロンドン、ニューヨーク、東京が不況から最大の打撃を被ったわけではない。また、いわゆる専門職や管理職の人々がいちばん深刻な打撃を受けているわけではない。イギリスでは、低所得者層、そしてとくに中部や北部の昔ながらの工業都市の低所得の人々が一番打撃を受けているということです。日本の全国紙などでも、同じような報道がされているのではないのでしょうか。ですから、今日われわれもこの問題を無視することはできません。

さて、ヨーロッパの都市の現状について非常に貴重な研究が行われました。EUから委託されたコンサルタント会社が行ったものです。その結果を見ますと、ヨーロッパの都市はおおよそ三つに分類することができるということです。長期的に見ても成功している都市、いわゆるGDPの伸び率、労働者1人当たりのGDPの伸びが大きいのは、首都や知識拠点と呼ばれるような都市です。一番成績が悪かった、最悪の状況が見られるのは、例えばイギリスでは古くからの伝統的な工業中心都市で、ほかの種類の都市はその中間ぐらいに位置しています。

こうした都市の分析には興味がつきませんが、この調査結果を要約した表をお見せしましょう。**[01-02]**この三つのタイプの都市を、革新性、企業家精神、才能・人材、そして創造性(クリエイティビティ)という項目でそれぞれ評価をし、まとめたものです。いわゆる金融や経済の拠点や首都などが成績が良く、昔ながらの工業を中心とした都市はもっとも点数が低い。そして、そのほかの都市はだいたい中間にあることが、ここでも分かります。われわれが取り上げなければならない問題は明らかになってきました。

この結果と比較しうる大変面白い、もう一つ別の調査があります。ピーター・テイラー教授が所長を務めるラフバラ大学「グローバル化と世界の都市に関する研究センター(GaWC)」が行った調査で、5年前に発表されました。**[03]**この調査では、世界経済において、トップの位置にあり、かつ経済の動きを制御する力を持っているのは、ロンドン、パリ、ニューヨーク、東京であるとしています。また、ほかのいろいろな調査研究でも、同じ結果が出ています。

その下の方に行きますと、ここでも同じような結果とおなじみの都市の名前が出てきます。多くがヨーロッパの都市ですが、これは、たまたまヨーロッパには国民国家が数多く含まれているため、ヨーロッパ諸国の首都は国際ネットワークの中で大きな力を持っているということでもあります。

ここで強調しておきたいのは、この調査結果は人口や雇用の規模による分類とはまったく異なるということです。非常に高度な分析に基づいて、どの都市が本当の意味で世界経済を統括しコントロールしているのか、とりわけ高度に発達したサービス産業の本社・支社などの組織構成のなかで、どの都市がもっともリードしているのかを示しているのです。

日本経済の重要性を考えると、このリストには日本の都市があまり出てこないということに気がつきます。同じ研究センターのより新しい調査結果によると、首都である都市は成績を向上させているようです。また、アメリカの都市は全体として、このランキングで下降する傾向を見せており、その一方でヨーロッパの都市、そしてアジアの都市、特に太平洋側のアジア各都市は、世界経済の中で地位を向上させています。これは非常に興味深いことで、われわれにとっても、皆さんにとっても、非常に勇気付けられる調査結果と言えるのではないのでしょうか。

また、注目すべきことですが、このラフバラ大学の調査による分類は、2000年に2人の研究者が行った、

創造性が都市を変える

●
2009年9月4日[金] 13:45~15:00
関内ホール[大ホール]



ピーター・ホール
Sir Peter Hall

ロンドン大学バートレット校教授
イギリス

A New Urban Hierarchy?
Taylor (GaWC) 2004:

A. ALPHA WORLD CITIES
12: LONDON, Paris, New York, Tokyo
10: Chicago, Frankfurt, Hong Kong, Los Angeles, Milan, Singapore

B. BETA WORLD CITIES
9: San Francisco, Sydney, Toronto, Zürich
8: Brussels, Madrid, Mexico City, São Paulo
7: Moscow, Seoul

European cities in italics

The GaWC hierarchy (ctd.)

C. GAMMA WORLD CITIES
6: Amsterdam, Boston, Caracas, Dallas, Düsseldorf, Geneva, Houston, Jakarta, Johannesburg, Melbourne, Osaka, Prague, Santiago, Taipei, Washington
5: Bangkok, Beijing, Rome, Stockholm, Warsaw
4: Atlanta, Barcelona, Berlin, Buenos Aires, Budapest, Copenhagen, Hamburg, Istanbul, Kuala Lumpur, Manila, Miami, Minneapolis, Montreal, München, Shanghai

UK Cities in Europe and the World: Latest GaWC Evidence (1)

Legend:
● Capital cities: more likely to experience positive change than negative change
● US cities: more likely to experience negative change than positive change
● Western Europe cities: more likely to experience positive change than negative change
● Pacific Asia cities: more likely to experience positive change than negative change
● Sub-Saharan Africa cities: more likely to experience negative change than positive change
● Greater Middle East cities: more likely to experience positive change than negative change

空路による世界の接続性に関する調査の結果ともきわめて近いものです。

同じ都市のグループ、まずアメリカ、東海岸のニューヨークやワシントン、西海岸からはサンフランシスコ、ロサンゼルスなどが入っています。それから、次のグループはロンドンが支配的な地位を保っていますが、ほかにもヨーロッパの商業中心地であるパリ、マドリッド、フランクフルトなどが入っています。第3のグループは、東アジアの都市です。やはり東京がはるかに抜きん出てトップを走っています。つまり、人が往来するシステムは、世界経済の統括やコントロールと深く関係しているということです。

このことから現在の不況の背景を理解できるのではないのでしょうか。ヨーロッパやアジアの太平洋岸にあって、力強い動きを見せるこれらの都市や地域はその地位がさらに高まりつつあります。それはすなわち、主として人の交流、サービスの交流、なかんずくアイデアの交流が増えているということです。飛行機を使って人々はあちこちに飛んで行き、実際に会って情報を交換する。こうした交流が増してきているのです。こうしたことはロンドンの大学で私が15年ほど前に行った調査結果とも関連しています。この調査では、繁栄する諸都市において、何が経済の原動力になっているのかを探ろうとしました。

まず金融・ビジネスサービス業です。これは皆さんよくご存じでしょう。この2年ほどは大きな打撃を被っている分野です。ロンドンも、ニューヨークも、大手銀行の破たんが相次いで、とくに厳しい状況にあります。それでもまだまだ底力があるようです。

2番目に関連してくる要素は、権力と影響力です。政府機関の本部、商業の集中度、企業の本社、さらに貿易団体や国際機関などのことで、これらは国際金融の中心都市、特に商業の中心地や政治的中心地である首都に集まる傾向があります。

そして、3番目の要素は特にこの国際会議にとって重要な意味を持ちます。つまり、創造的で文化的なビジネスという要素であり、ファッション、デザイン、出版、映画、テレビ、音楽、芸術などが含まれます。

さらに、このビジネスグループと大きく関係してくる要素として観光という分野があります。この分野には、ホテルビジネスや、観光客を引き付ける魅力ある名所やエンタテインメントの産業も含まれます。

ここで挙げた諸分野は相乗的に効果を上げる関係にあります。しかも、これら四つの分野の間にはすき間があり、国際都市の経済にとって重要な部分はそのスペースに入ってくるのです。例えば、広告代理店、メディア、マーケティング、PR、会計事務所など。さらに、ショッピング、レストラン、展覧会や国際会議。あるいは、劇場、ギャラリー、夜の娯楽など。このような活動分野がこのすき間に入ってくるわけですが、実際はどこにでも入りうるのです。というのも、重要な点は、こうした活動すべてが主要な都市においてたがいに助け合い、相乗効果をもたらしており、複数の市場を形成し、輸出経済の構成要素ともなっています。例えば、横浜はその魅力で日本への観光客を数多く引き付けており、こうして国の経済にも貢献しています。外国からこの会議に参加しているわれわれは、ホテルの窓から何千人もの日本の子どもたちが大がかりな展覧会のために訪れている様子が目に入ります。こういうことも地元の経済に貢献しているということをお忘れではありません。

ここで重要なことは、フェイス・トゥ・フェイスの、人々が互いに顔を合わせる活動なのだと申し上げておきたい。もちろん、エレクトロニクス技術の進展により、高度な電子的通信手段は非常に発達しています。しかし、新技術によるコミュニケーションには限界があり、対面型のコミュニケーションの重要性は変わりません。

そもそも、われわれはなぜこの関内ホールに集まっているのでしょうか。私はロンドンにいたままで、皆さんもご自宅にいたままでよかったのです。インターネットなどの電子的手段を使ってコミュニケーションは十分できたはずですから。それでも、わざわざ飛行機や電車を使ってここまでやって来るのはなぜか。また、コンベンション産業と呼ばれる業種がこの20年で大きく発展してきたのはなぜなのか。それは、電子的手段によるやり取りには限界があり、互いに顔を合わせて対話したいというニーズがあるためです。まさにこうした対面のニーズがあるという理由から、先に挙げた諸都市はまだまだ発展し続けていると言ってもよいでしょう。

都市のさまざまな活動をほかの都市に輸出してしまうこともあるでしょう。例えば、ありふれた小売業などはよその都市に出ていきます。あるいは、地方に置かれた政府系機関もほかの都市に移る。製造拠点もほかに移転される。ほかの都市だけではなく、外国に移転されることもあるでしょう。中国が一大製造拠点になっているのはよい例です。

ところで、こうして輸出される活動のひとつひとつから、実は別の活動や雇用が生まれているのです。こ

これは輸入されるのではなく、例外なく創出されるものです。経済学の専門用語でいうならば、内発的な市場経済の強みによって新たな活動が生み出される。この点は十分に留意すべきです。

これらの都市での活動の多くには共通点があります。フェイス・トゥ・フェイス、対面型のコミュニケーションが必要だということだけではありません。きわめて創造性豊かな、革新的な人々が顔を合わせて交流することが必要なのです。こうした交流に、創造的な彼らは英語で「バズ(buzz)」というような、ある種の興奮や刺激を求めています。こうして今、私が話しているようなときだけが重要なわけではなく、例えば午後の休憩時間に何が起るか、飲み物やディナーを楽しみながら、非公式な席で何が話されるのか。これこそが対面型コミュニケーションにおいてもっとも重要なことです。

おそらく皆さんのほぼ全員がご存知だろうと思いますが、アメリカにリチャード・フロリダという都市論の研究者がいます。彼が論じている問題について少しお話ししたいと思います。彼は、知識経済と呼ばれる新しい経済は、やはり新しい「創造階級(クリエイティブ・クラス)」に依存していると言います。彼によると、この創造階級に属する人々は利便性のあるところに住みたがる。具体的には、サンフランシスコ近くのベイエリア、テキサス州オースティン、シアトル周辺の地域などです。これらは皆、非常に成功した経済地域でもあります。

創造階級の人々は、なぜこうした地域にやって来るのでしょうか。彼らは、ハードウェアとして分類される高速道路、空港、娯楽施設や歓楽街には無関心なのだとされます。ただし、この説には疑問を抱かざるを得ません。サンフランシスコには重要な空港があり、シアトルにもかなり大きな空港があります。オースティンにすら近くにダラス・フォートワース空港があります。やはり、今日の都市経済は空港なしではやっていけないのではないのでしょうか。いずれにしても、創造階級が求めているのは、高度な快適さや生活を楽しむような独特の自由な雰囲気だということです。この雰囲気については、説明するのも、分析するのも難しく、とりわけ、数値で分析するのはとても難しい。けれども、独自の雰囲気があるおかげで、人々は自己を表現し、自由な形で交流ができる。このような雰囲気は、横浜をはじめ、世界の多くの都市において見出されるもののようです。

ただし、フロリダの分析には多少の疑問符を付けざるを得ないと思います。彼はボヘミアン指数なるものを論じています。これは、ある特定の経済地区のクリエイティブな人々、例えば作家、デザイナー、音楽家、俳優、監督、画家、彫刻家、写真家、ダンサーなどの数で表されます。彼は、このボヘミアン指数がその都市の性格や実態を分析する際の予測因子になるとして、実際に統計分析をおこない、その相関性を論じています。彼の分析で私が問題だと思うのは、何が原因で何が起るのかという因果関係についてです。誤った相関性を論じることが危険であることは皆さんもご存知でしょう。いわゆる「因果の矢」をもとに論じるならば、逆方向の因果関係を考えることも可能です。単にクリエイティブな人たちがいるということが原因で都市の経済が発展する、というだけでなく、私は循環するようなプロセスを考えています。つまり、経済的に成功している地域には、才能あるクリエイティブな人々が集まる。その結果、新たな活動が生まれ、都市の経済発展と創造階級の人数は円環的な関係が生まれるのだらうと考えています。

では、それぞれの都市において、こうしたプラスの循環は、どこで、どのようにして始まるのでしょうか。この問いに答えるのは難しいのですが、リチャード・フロリダの分析は一つの答えを示唆しています。都市における「生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)」が問題だと言うのです。

ひょっとしたら、これが一つのヒントになるかもしれません。いつも高い評価を受けるバンクーバーは、海に近く、山々に囲まれて、素晴らしい自然環境に恵まれています。さらに、非常によく考えられた都市計画が実施されてきました。ウォーターフロントにある、実に開放的なオープンスペースもそうした計画の成果です。そして、バンクーバーに行った誰もが、素晴らしい生活の質がある都市だと断言するわけです。しかし、まだ疑問は残ります。生活の質については、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパの都市が圧倒的に強いのですが、そのうちの9都市は海沿いに位置しています。ウォーターフロントの都市、横浜にとってはいいニュースです。では、これら上位11都市が世界で最もクリエイティブな都市なののでしょうか。必ずしも劣っているとは言いませんが———それぞれの都市出身の方ならば、決して劣っていないとおっしゃるでしょう———しかし、本当に世界で最も創造性に満ちた都市であると断言するのは躊躇してしまいます。ですから、もう少し詳細に分析していかなくてはなりません。

ここで、私自身の研究と分析をご紹介しますと思います。11年前に発表したもので、かなり分厚い1冊の本になっています。この研究では、都市におけるイノベーションが成功するための条件を、どの程度まで

特定できるのかという問題を論じています。

この研究で、私は三つの異なるイノベーションを特定しようとしてきました。まず、文化的・知的なイノベーション、次に技術・生産面でのイノベーション、三つ目が文化・技術におけるイノベーションというべきもので、これは最初の二つを混ぜたものです。さらにもう一つ、四つ目のイノベーションも考えました。これを技術・組織的なイノベーションと呼んでいます。これは先の三つのイノベーションが機能するように市の行政がいかに自らをうまく組織化できるかという能力についてです。今日は時間も限られていますので、この四つ目のイノベーションには触れず、最初の三つについてのみお話しすることにします。

この研究で、私は歴史的なアプローチを採用し、まず最初に六つの都市の例を取り上げました。[04-05]いずれも文化的に見て際立った革新性を見せた都市です。ここで日本の皆さまにお詫びしなくてはならないのですが、これらの都市はすべて西洋世界、西洋文明から選びました。というのも、日本や中国の文明に関してはあまりにも無知ですから、分析対象とすべき都市を選ぶこともできなかったのです。

さて、六つの都市とは、ペリクレスの時代、偉大な哲学者や作家が生きた古代ギリシャのアテネ。ルネサンス期のフィレンツェ、シェイクスピアが生きたロンドン、モーツアルト、ベートーベン、シューベルトが活躍した時代のウィーン、それから1900年前後のパリ。印象派の後にピカソとキュビズムの画家たちが登場する時代です。最後に1920年のベルリンで、この時代は、演劇、映画、グラフィックアートをはじめとして、多くの分野で生産性が高まった見事な例と言えるでしょう。

では、これらの都市に共通するとは特色は何でしょうか。

まず、経済的・社会的な大変動期にあった、というのが一つの共通項です。それから、商取引や交易が非常に盛んで、そのため新しい経済の仕組みや組織、いわば資本主義的な組織体制が誕生していました。21世紀の基準で考えれば、貧しいのかもしれませんが、それぞれの時代においては、比較的豊かな都市だったことも共通しています。これらの都市は少数のきわめて裕福な個人を通じて潤っていたということも事実です。このことから、個人が芸術のパトロンとなることもできました。さらに重要なことは、コミュニティ、すなわち都市や、ときには国家が芸術を擁護するパトロンになることもあったということです。

これが磁石のように才能ある人々を引き付けました。さまざまな人がよその都市、地域からやって来た。さらに遠いところから移り住む人々もいました。こうした移民の中には、優れたアーティストがいただけでなく、芸術のパトロンになる人もかなりいました。

ただ、もう少し深く見ていくと、より重要な点が浮かび上がってきます。これらの都市は急速な変化を経験していたわけですが、それは社会的な変容であり、価値観やものの見方も変わる時代でした。どの都市にもはっきりと見出されるこの変化が、社会のなかにある種の緊張関係を生み出すことになりました。いわば、保守層とラディカルな進歩派との間の緊張で、政治的な対立でもあったのですが、より深いところで、異なる世界観の対立においてこの緊張は生まれていたのです。そして、外からやって来たクリエイティブな人々、いわゆるアウトサイダーこそ、この世界観や価値観をめぐる緊張関係を体現する存在でした。彼らは伝統的な枠にとらわれない考えをもたらし存在でもあったのです。

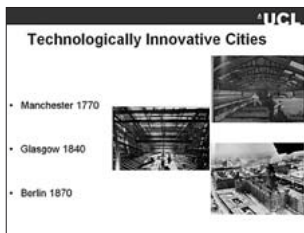
1900年のパリは、この点でもっとも興味深い例の一つです。ピカソはバルセロナ出身で、スペインからパリにやってきた移民です。ピカソは、世界の中でパリだけが自分の才能を伸ばすに相応しい大都市だと感じていました。そして、まさにパリにおいて、アーティストとして現実をどう把握して表現するかという問題に、彼は革命と呼ぶに相応しい転換をもたらします。パリの美術界も最初は反発しましたが、後には受け入れるようになりました。

ここで決定的に重要な問題が一つ出てきます。これらの都市すべてには、文化的にみて革新的かつ創造的な環境があったわけですが、これは単にそれぞれの都市の社会的・経済的な力を表現するものなのでしょうか。つまり、当時の経済や社会の状態を表すものなのかということです。これはある意味でマルクス主義的な分析です。あるいは、社会的・経済的状況だけでは捉えきれない、それぞれの都市に何か特有な雰囲気があったと考えるべきなののでしょうか。私の本では、どちらもあったと結論づけました。

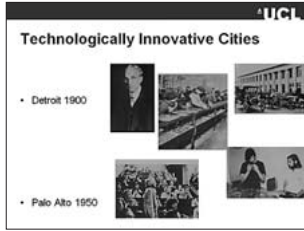
例えばシエナ、その少し後のミラノ、フィレンツェなど、ルネサンス期のイタリアの都市を見ていくと、いずれの都市も同じような社会的・経済的な特色を持っていることがわかります。しかしながら、フィレンツェだけがイタリア・ルネサンス文化においては傑出した存在でした。

この問題についてさらに論じたいところですが、時間のことも気にしなくてはなりません。ですから、二つ目のイノベーションへと移りたいと思います。技術面・生産性でのイノベーションについてです。





06



07

ここでは七つの都市を選びました。[06-07]まず、綿織物産業を舞台にした第一次産業革命の頃のマンチェスター。それから、もう少し後の時代のグラスゴー、造船業で世界一になった都市です。1870年以降のベルリン。この時代、電気関係、後には電子関係の生産業で非常に発展し、世界でも有数の都市となりました。さらに後の時代になりますが、1900年頃のアメリカ・デトロイト。当然のことながら、ヘンリー・フォードと自動車生産において彼がもたらした革命が関係してきます。この革命的な組み立てラインでモデルTと呼ばれる有名な車が作られていました。その結果、自動車の普及や販売においても革命が起こり、自動車は限られた人々だけのものではなく、多くの人々が買えるものになったのです。カリフォルニア州のパロアルトも取り上げました。1950~1980年のパソコンが誕生する時代についてですが、これについては、後ほどお話しします。また、ここでは言及しませんが、1970年代の東京、そして隣接する神奈川県の地域も検討しました。

こういった地域に共通する特徴は何でしょうか。まず第一に、多くの地域にボトムアップ型とも言うべき、非常にクリエイティブな一個人によるイノベーションがありました。彼らは基本的にはアウトサイダーで、多くの場合、あまり教育も受けず、技術もない状態から出発し、仕事をしながら学んでいきました。また、国際社会においては、さほど重要な都市ではありませんでした。世界の中心ではなく、中心からやや外れたところにある都市でした。例えば、明治維新後、東京が産業の飛躍的発展を遂げていったとき、はじめは世界的に重要な都市ではありませんでした。国際的にも重要性が急速に増していったのは、発展の後のことです。また、オープンな社会で、伝統に縛られなかったということも、これらの都市の特徴です。そして、優れたサービスや熟練労働のシステムを形成し、地元のネットワークを整備していったのです。また、常にイノベーションを促す雰囲気というものがありました。このイノベーションは、一個人、あるいは一つの会社が、それぞれお互いに真似をすることによって、さらに醸成されていきました。ベルリンや東京がよい例ですが、これらの都市はその重要な地位を確立した後も、そのイノベーションの力を維持しました。ここで注意すべき重要な問題は、ほとんどの都市でイノベーションというのは個人に依拠するものだったということです。けれども、ベルリンや東京の場合には、それ以上に国家の影響が強く、国が管理する形でのイノベーションが見られました。特に初期の段階ではそうでした。この点については、ディスカッションの際にお話しできればと思います。

さて、三つ目のタイプのイノベーションはハイブリッド型とも言えるもので、これまでの二つの原動力、すなわち芸術文化と技術とが掛け合わされたイノベーションです。

アメリカの例を二つ用意しました。[08]一つは近代映画が誕生した、1920年代のロサンゼルス・ハリウッドです。ここでスタジオシステムが誕生し、ワーナー・ブラザーズはその代表格です。実生活でのワーナー兄弟は仲が悪かったようですが、ともかく彼らは素晴らしい映画スタジオを作りました。

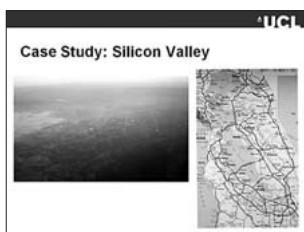
二つ目の例は、近代音楽発祥の地としてテネシー州メンフィスを取り上げました。1955年当時、メンフィスはほとんど無名の都市でした。ところがある日、一人のトラックの運転手があまりぱっとしない録音スタジオにやって来て、自分は「歌えるよ」と言ったのです。スタジオのオーナーは「では、歌ってみる」と受け入れた。この運転手こそエルヴィス・プレスリーでした。彼はポピュラー音楽に革命をもたらしました。この二つの都市の共通項は何でしょうか。両方とも、かなり辺鄙なところにある、無名の場所として出発しました。そして、芸術の商品化と大量生産を実現しました。ことの善し悪しは別にして、フォードのTモデルのように、芸術を商品化したわけです。音楽や映像の放送を可能にただけでなく、作品をケースに入れて、遠く離れたところでも簡単に再生できるものにしました。芸術作品を映画館、テレビ、DVD、あるいはダウンロードして、多種多様な媒体で再生できるようにしたのです。

この業界は今日なお特異な存在であり続けています。というのは、この産業では大量生産と流通と、生のパフォーマンスの重要性とが見事に結びついているからです。電子的なコミュニケーションが対面型のコミュニケーションに結びついている、と言ってもよいでしょう。たとえば、大好きなオーケストラや歌手の演奏をさまざまな電子的手段で聴く機会が増えれば、それだけ生演奏を聴きたいという欲求が高まり、その結果、劇場やコンサートホール、芸術文化センターなどがライブ・パフォーマンスの拠点となり、その重要性はどんどん増していく、というわけです。

では、先ほど名前を出したシリコンバレーを一つのケーススタディとして短く取り上げたいと思います。[09]わざわざ取り上げるのは、この地域は最も優れた技術革新、すなわちイノベーションの例としてよく言及されますが、それだけでなく、世界が今後どのような方向に向かうのかを示している、と私は考え



08



09

ているからです。シリコンバレーはサンフランシスコの南、サンフランシスコ半島にある地域のこと、パロアルトがその中心です。スタンフォード大学の拠点でもあり、ここがすべての出発点だったと言っても過言ではありません。

では、シリコンバレーの歴史を簡単に辿ってみましょう。どういう段階を経て進化を遂げたのでしょうか。継続的に進化し続けてきた点がいへん興味深い。いわば、一種の連鎖反応のように、一つのイノベーションからまた別のイノベーションに、というふうに進化していったのです。

100年前、このサンタクララ・バレーと呼ばれていた地域は、果樹園などが広がる農村地帯でした。80年前でも事情は同じで、この地域がどう変貌していくかなど、だれも考えていませんでした。そして、小さな、一流とはいえないスタンフォード大学がありました。ただ、この大学は技術系分野に非常に力を入れており、西海岸のMIT(マサチューセッツ工科大学)になりたいという強い野心を抱いていました。

この野心を特に強く抱いていたのが、フレデリック・ターマンという人物です。彼はMITで博士号を取得した後、健康上の理由でスタンフォードに戻っていたのですが、素晴らしい電子工学研究課程を創設しました。

1930年代、彼は学生に対して、僅かな資金で小さくてもよいから自分たちで新しい企業を作るよう、それも大学の近くで立ち上げる起業するよう奨励していました。早い時期にその呼びかけに応じた学生のなかに、ウィリアム・ヒューレットとデヴィッド・パッカードという、HPの略称で知られるヒューレット・パッカード社の生みの親である2人がいます。ターマン自身も会社設立の際には個人的に何ドルか支援しました。2人の学生はガレッジで、1938年にHP社を始めます。その後、どれほど発展していったかは、皆さんご存知のとおりです。

1950年代になると、今度は東海岸、ニュージャージー州のベル研究所で、初めてのトランジスタを3人の研究者が開発しました。彼らは後にノーベル賞を受賞します。開発をリードしたのはウィリアム・ショックリーという人物で、その後1955年に彼は家庭の事情でパロアルトに移り住みます。そして、小さな会社を始めたのですが、その会社は他の多くの会社を生み出していくことになりました。

ウィリアム・ショックリーが科学技術の天才だったことは事実ですが、一緒に仕事をしにくい、性格的に難しい人でもあったようです。実際、彼の会社から仲間は去り、まずフェアチャイルドという会社を作りました。その後も退社して別会社を設立する流れは続き、そういう会社はフェアチルドレンと呼ばれるようにもなりました。

こうして、新しい会社が大量に生まれていきます。ある会社が別の会社を生み出し、そこからさらに別の会社が誕生するというように、分裂するように会社が次々と設立されたのです。

中でも最も重要な会社はインテルでした。同社はソリッド・ステート・デバイスの革命で主導的役割を演じ、最終的にはICがトランジスタに取って代わることになりました。

ところで、こうした動きのなかで、古い会社の隣りに新しい会社がオープンするというように、次々と誕生した企業は皆、距離的にも近い関係を保っていました。それゆえ生産もこの地域に集中することになり、結果として、技術的な情報も新旧の企業間で共有することになりました。そして、互いに競争しながら協力もするという企業間の関係ができあがりました。彼らを結びつけていたのは、新しい知識探究への意欲でした。知識や情報の交換は、地元のレストランで朝食を一緒に食べながら、あるいは夜のバーで技術的な問題を話し合うといったスタイルで行われていました。

さて、1960年代のこうしたやり方に則って、1971年、IC(集積回路)がインテルによって開発されます。そして、ここから誰が最初のパソコンを生み出すかという競争が始まりました。けれども、PCのイノベーションが実現したのは、シリコンバレーではなく、遠く離れたニューメキシコ州アルバカーキというほとんど誰も知らないような町においてでした。一方のインテルは、この時点ですでに非常に優れた最初のマイクロプロセッサを開発していました。71年当時、これが決定的に重要でした。

1975年になると、組み立て型の初めてのパソコンが生まれました。けれども、筋金入りのパソコン好きや専門家でもなければ、このモデルを組み立てたり作動させることができない、といったお粗末なものでした。これがアルバカーキでいちばん最初にできたパソコンです。

一方、パロアルトでは、最初のパソコンを作ろうと競争していた人々が互いに顔を合わせては情報交換を続けていました。こうした会合は「ホーム・ブルー(自家製)コンピュータ・クラブ」と呼ばれ、大学周辺で開かれていましたが、1976年スティーヴ・ジョブズとスティーヴ・ウォズニアクという2人の若者がブレイクスルーを達成します。アップルⅠを作り出したのです。これは商業的にもはじめて成功したパソコン

となりました。その後のことは皆さんもよくご存知でしょう。

シリコンバレーは、80年代、90年代とさらに発展していきました。シリコンバレーの刷新する力、つまりイノベーションは尽きてしまったと言われたこともあります。結局、そうなることはありませんでした。というのも、1985年頃から新しいイノベーションが始まったからです。例えばサン・マイクロシステムズに代表されるような、ソフトやシステム開発などの重要度が増していったからです。そして、ソフトウェア開発がシリコンバレーがもっとも得意とする、そしてもっとも重要な分野となりました。

その代表格アドビシステムズも2人のパートナーが設立した会社です。1982年、今度はガレージではなく、小さな軒家でアドビ社は始まりました。彼らはゼロックス社が資金を提供していた、非営利組織のパロアルト・リサーチセンター(PARC)に所属していたのですが、自分たちが開発した「ポストスクリプト」を商品化するために独立します。ポストスクリプトは皆さんご存知だと思いますが、さらに「フォトショップ」、「アクトバット」が開発されました。いずれも世界中に普及したヒット商品で、今では誰もが毎日使っています。そして、アドビ社の巨大な本社ビルはサンノゼにあります。20年で、まさに小さな家から巨大ビルへと発展した、素晴らしい例だと言えるでしょう。

それ以降も、目覚ましいイノベーションは続きます。しかし、もっとも重要なイノベーションは、今回もシリコンバレーから始まったものではありませんでした。1989年、スイスのCERN(欧州原子核研究機構)で粒子加速器の研究をしていたティム・バーナーズ=リーという人物が発表した論文が発端でした。彼はその論文でワールド・ワイド・ウェブ(WWW)を提案をしたのです。

この人の驚くべき点は、自身が生み出したイノベーションの商品化を拒否したことです。これを承認すれば、世界でいちばんの大金持ちになっていたことでしょう。しかし、彼はごく普通の研究者にとどまることを選びました。彼は今、MITの教授です。

しかし、ティム・バーナーズ=リーが嫌った商品化は、まもなく別の人物が行うことになります。まだ学生だった非常に若いアメリカ人で、当時はイリノイ州アーバナにいましたが、その後シリコンバレーに移り、はじめて商品化されたウェブ・ブラウザ、ネットスケープを開発しました。

さらに驚くべきストーリーは、皆さんもよくご存知だと思いますが、スタンフォード大学の学生寮でルームメートだった2人の学生、ラリー・ページとセルゲイ・ブリンがグーグルを発表したことです。アルゴリズムを開発し、それを基にこの検索エンジンを作り上げ、1年後、その名前を商標登録しました。1998年、またもやシリコンバレーの古典的パターンに則って、パロアルトのスタンフォード大学近くのガレージで起業したのです。2005年には、グーグル社の時価総額は520億ドルにもなりました。これは知識を巧みに商品化した好例ですが、シリコンバレー的なパターンに連なるものでもあります。すなわち、開発の過程で、対話型のコミュニケーション、インフォーマルな形でのコミュニケーションがきわめて重要だったということです。

では、次の偉大なイノベーションの波はどこで発生するのでしょうか。これが次にわれわれが考えるべき問題です。この写真は私の著書にも採録したもので、私の大好きな1枚です。[10]映っているのはビル・ゲイツ。その手前にいるのがポール・アレンです。1968年、当時2人はシアトルのレイクサイド・ハイスクールに在学中、大学進学直前の写真です。その後、ビル・ゲイツはハーバード大学に進みますが、中退してマイクロソフトを創設しました。たしかにことは、次の新しいイノベーションは、第3番目のハイブリッド型のもだろうということです。すなわち、芸術と技術が融合した形のイノベーションです。インターネットを基本的なインフラとして活用し、新たな付加価値サービスを提供する形でのイノベーションだろうと考えています。

1998年に出した著書の中で、デジタル化が通信、テレビ、コンピュータなどの融合を可能にするという事実を踏まえて、次のイノベーションで重要な鍵となるのはITのデジタル化だろう、と予測しました。

10年前、さほど先見性がなくても、こうした予測をすることはできました。なぜなら、すでにITのデジタル化は実現されつつありましたから。以後、その動きは変わらず、ますます広く普及していったのは皆さんご承知のとおりです。そして、どんどん進化するインターネットも誕生し、そのおかげで、今やわれわれはほとんど何でも好きなことがネット上でできるようになりました。

そして、特に顕著になってきているのは、革新的な個人が新しい情報ビジネスを始めようと、革新的な会社を立ち上げていることです。シリコンバレーの言葉で言えば、彼らは「キラー・アプリケーション(キラーアプス)」を求めているのです。キラーアプスというのは、検索エンジン市場におけるグーグルの



ように、市場を独占するほど普及し、人気のあるソフトウェアやコンテンツのことです。そして、とりわけ高度に発達したマルチメディアがキラーアプスには重要なものとなってきました。

こうしたマルチメディア企業を動かすのは新しいタイプの個人でした。ロンドンの『エコノミスト』誌はこのようなテーマを得意としているのですが、ちょうど10年前、マルチメディア革命で成功した新しい人種を「テクノ・ボーボー」という造語で表現しました。つまり、「技術に長けたボヘミアン」、ボヘミアンの・アーティスト的な発想をして、さらに技術的能力もある人たち、ということになります。

けさのツアーに参加された方はご覧になったと思いますが、ここ横浜には、例えば電車の高架線下などに小さな新興企業がたくさんあります。そこに行けば、アーティストも技術力がなければ作品の制作ができないような時代になっていることを実感されるでしょう。これまで、技術系と芸術系というのは明確に分かれていて、例えば右脳、左脳、それぞれの働きと関連づけて論じられることもありました。しかし、今では左右の脳を同時に活用できるような人物が必要になっているのです。

ここで非常に重要な問題が出てきます。この問題は、横浜市にとっても、世界中のどの都市にとっても重要なものです。すなわち、どこでこういう人たちが見付かるのか。どこが新しい創造都市となるのか。どの都市が新しいタイプの創造的な企業や活動を生み出すことになるのかという問題です。

新しい創造都市には三つのタイプが考えられます。第一に、長い歴史を持つ大都市です。こうした大都市にはイノベーションをいつの時代も保持するだけの柔軟性が備わっているものです。次に、いわゆるサンベルトの都市。温暖な気候に恵まれた、暮らしやすい都市です。3番目のタイプはルネサンス都市と呼ばれる都市ですが、このタイプは横浜市にとりわけ重要な意味を持つのではないのでしょうか。では、それぞれのタイプについて説明していきましょう。

[11] 例えばロンドンのような、すでに何もかもが揃っているような大都市では、すべてがうまくいっているように見受けられます。美術館・博物館、ギャラリー、劇場、大学など、優れた文化施設も揃っています。ですから、大都市はすでに有利な立場にあり、その力はますます強くなっていくというわけです。

そして、サンベルトの都市。[12] さきほどと同じ、バンクーバーの写真をまたお見せしていますが、海があり、山があり、気候も穏やかで、快適なライフスタイルが楽しめ、しかも都会的な雰囲気もある。だからこそ好まれるのです。それだけではなく、文化的にも優れていると言えます。バンクーバーにはUBC(ブリティッシュコロンビア大学)とサイモンフレーザーという二つの名門大学がありますし、アートギャラリーや劇場も高い評価を得ており、人々を引き付けています。ですから、サンベルトの都市というのも、最初に挙げた大都市には及ばないかもしれませんが、有利で強い立場にあると言えるでしょう。

けれども、もっとも興味深いのは3番目のルネサンス都市のケースです。[13] 横浜市は典型的な例といえるでしょう。古くからの産業がある港湾都市ですが、産業はその力を失ってきており、世界の中で新しい役割を求めながら、大都市やサンベルト都市と競争している、そういう都市です。横浜市を見てみると、東京都・神奈川県にまたがる大都市圏に属しているとも言えますが、すでに安定した力を誇る大都市の首都、東京と競合するルネサンス都市としてとらえることも可能です。

これはスペイン・ビルバオにあるグッゲンハイム美術館の写真です。どの都市もこの美術館を真似したがっているとされています。これらのルネサンス都市にも優れた点はあります。産業発展期に富を蓄えたおかげで、だいたい裕福な都市と言えます。ですから、美術館や博物館、ギャラリー、大学もあります。そして、産業考古学的な観光が可能です。産業都市、港湾都市としての長い歴史が多くの観光客を魅了するのです。ここ横浜でも、港湾都市の長い歴史を体験しようと、復元された歴史的建造物にやって来る観光客は多いはず。これらのルネサンス都市は互いに競合する関係にあります。そして、都会型観光とも言うべき新しい観光スタイルの一翼を担ってまいります。

ただ、限界もあり、危険性もあります。あまりにも多くの都市が皆同じことをやっているからです。100年ほど前、アメリカの偉大な作家、ガートルード・スタインは自分が生まれ育ったカリフォルニア州オークランドについて、「何もない。それが問題だ」と言いました。つまり、特色がない、記憶に残るものが何もない、ということです。重要なことは、各都市が独自のアイデンティティや、ほかの都市にはない、独自の売り、マーケティング用語で言うUSP(ユニーク・セリング・ポイント)を確立しなくてはならないということです。

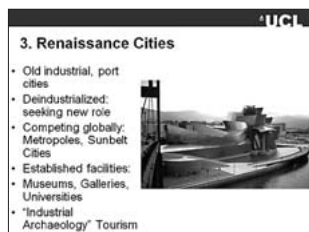
ここで鍵となるのは、美術館、博物館、ギャラリー、コンサートホールといった、受け身的な文化の消費から出発して、よりアクティブな文化創造へと導くことです。実際、これらのルネサンス都市に求められて



● 11



● 12



● 13

いるのは、よりアクティブな創造性なのです。そしてアクティブな創造性とパッシブな、つまり受け身的な創造性との間に相乗効果を作り出さなくてはなりません。私の国イギリスではグラスゴーとゲイツヘッドでこうした動きが出てきています。横浜でも同じような動きが出てきているようです。ここで必要となるのは、非現実としか思えないようなアイデアを現実のものにしていくための度はずれた想像力と書いてよいでしょう。

また、新しいタイプの都市計画も必要とされます。課題は多いはずですが、大きなチャンスでもあります。というのは、都市としての高い質(クオリティ)を作り出すための都市計画であるわけですから。産業発展期を経て失われてしまった都市の質をもう一度作り出して、クリエイティブな人々をもう一度引き付けようとする試みで、そのためには明快で建設的な都市計画を提起しなくてはなりません。このことは横浜市をみればよくわかると思います。そして現在、世界中で多くの都市が同じような試みを始めています。新しい調査研究の結果があります。研究論文としてはまだ発表されていないと思いますが、インターネットでは閲覧することができます。MIT(マサチューセッツ工科大学)の研究グループが、いわゆる「新世紀都市」について行った調査研究です。残念ながら横浜は含まれていませんが、取り上げるべきだったと思います。ここでの調査対象は、アジア地域からソウル、北京、シンガポール、ヨーロッパからはイギリスのマンチェスター、フィレンツェ、コペンハーゲン、ヘルシンキ、ニューヨーク、リオデジャネイロなどです。これらの都市の共通点は何なのでしょう。まず、クリエイティブな産業を持つと腐心しています。そして、自分たちの「物語」を編み出し、よその都市とは違うことをアピールすることによって、自己のブランドを確立しようとしています。さらに、経済的な目標をはっきりと定めている。生活や仕事のための新しい環境を作り出そうともしている。まさに生活の質を高めようとしています。先ほどご紹介したフロリダが分析したように、クリエイティブな人々がやって来て、仕事をしたり、暮らしたくなるような、生活の質を作り出そうとしているのです。

こうしたクリエイティブな活動をサポートするために、きわめて高度に発達したコピキタス技術も提供しています。新しいスタイルの教育を見出すこともできます。従来の大学や研究機関だけでなく、市民や企業とも協同した教育を奨励しています。インキュベーションの機能を重視して、新しい組織、新しい運動、新しいサービスの誕生を促しています。これらの都市は、まさに生きた実験室になろうとしているわけです。こうした新しい活動は、それぞれの都市にある、非常に複雑で、多様な組織体によって支えられ、発展している。以上が、これらの都市のケーススタディから出てくる共通点です。

もう少し掘り下げて見てみましょう。真にクリエイティブなイノベーションは、厳密に言って都市のどういう場所で生まれているのでしょうか。創造的な革新性の最初の発火点はどこなのかということです。これは、UBC(ブリティッシュコロンビア大学)地理学部のトマス・ハットンという研究者が行ったたいへん興味深い調査の結果です。ここで取り上げられている都市は、バンクーバー、サンフランシスコ、ニューヨーク、ロンドンなどです。彼が指摘するのは、これらの都市では、高い革新性を備えた新興企業は、家賃が安い地区、つまり未開発で、どちらかというと荒れてしまった、あまり環境の良くない地区に集中しているということです。例外はシンガポールなのですが、この件については後ほどお話しします。さて、これはハットンの街バンクーバーの写真です。ご覧になっているのは高層ビルの密集地区で、ここが都心でありビジネスの中心地です。こちらの低層の建物が集まった地区には古い倉庫などが多く、荒廃した地区と言ってもよいところで、都心から離れた周縁部にあります。そして、まさにここがクリエイティブな産業が生まれている場所です。

これはハットンが作った地図ですが、[14]クラスター(密集地域)の在り方が分かります。ビジネス密集地区のクラスターはこうして写真の撮影地点まで広がっています。こちらのやや荒廃した地区は、オフィス家賃の安い物件が多く、新興企業が選びやすい地区になっています。

ハットンが2004年に発表した論文によると、バンクーバーは新興企業の発展という点で非常に成功した都市ですが、まさにそれゆえ、地区の高級化(ジェントリフィケーション)が密かに進み、新しい活動自体にとって脅威となりつつあるということです。特に、市の南部に新しい地下鉄路線が開通し、不動産の価値が上昇し続けています。

サンフランシスコにも同じような例があります。SOMA(South of Market Street)と呼ばれる地区は埠頭に近く、マーケット通りの貧しく、ダメな部分とされていました。ここもまた、家賃が安く、魅力もなく、どちらかというと荒れ果てた地区だったのです。1970年代にはゲイ・クラブの多い、中心から外れた地区



になっていました。

ところが80年代になると、控えめながらジェントリフィケーションが始まり、ハイテクやアートにかかわる人々がやって来るようになりました。そして、まさしく「テクノ・ボーホー」たちの、アートとテクノロジーが融合した新しい活動の場所になっていきました。若者たちにも人気の地区となり、週末ともなると、ダンスクラブはベイエリアからやって来る人々で賑わうようにもなりました。つまり、若者たちが土曜の夜には出かけたいと思うような、非常に楽しい、面白そうな場所になったのです。

その後、地区のジェントリフィケーションが本格的に始まりました。新しい国際会議場モスコニー・センターやSFMOMA(サンフランシスコ近代美術館)がオープンしたり、古い倉庫が改装されてロフトになったり——サンフランシスコではロフトマニアという新語も作られました——こういったことがジェントリフィケーションの過程で出てきた現象です。

一方、港の周辺は本当に荒れ果てていたのですが、2000年から再開発が始まりました。カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部のために新しいキャンパスが招致され、ここではバイオテクノロジーの研究が行われています。そして、新しい路面電車の路線も開通し、港まで電車で行けるようになりました。まさに、この地区全体が再開発されてきたわけですが、実は誤った方向に進んでいるのかもしれない。魅力的な低家賃と創造性が結びつくことがクリエイティブな活動にとってきわめて重要な要素だったわけですが、もはやこの地区ではこの結びつきが失われつつあるからです。

古典的な例として、ビルバオの再活性化が挙げられます。1980年、90年代と、ビルバオでは製造業がすたれてしまいました。けれども、1998年にグッゲンハイム美術館分館を開館させて、都市の再活性化を行い、その手法は世界中で真似されてきました。

イギリスからはゲイツヘッドをご紹介します。[15] イングランド北東部のニューキャッスル・アポン・タインの対岸にある都市です。この写真はニューキャッスル側からタイン川を見たもので、これが新しいミレニアム橋です。その向こうにあるのがバルティック現代美術センター、その隣がセイジ・ゲイツヘッドというコンサートホールです。両方とも、観光客誘致に成功しています。それだけでなく、両方とも、地元のアーティストやクリエイターを引きつける施設であると同時に、館内のスタジオで行われる研修などを通じて若者たちが集まる場所にもなっています。

こうした例から考えたいのは、計画されたイノベーションについてです。テクノポリスや科学都市を基盤としてイノベーションを図る計画もあります。例えば、南仏にあるソフィア・アンチポリス、台湾の台北に近い新竹サイエンスパーク。日本の筑波研究学園都市。すでに50年くらいの歴史があるのでしょうか。東京からもさほど遠くはありませんね。ラ・カルトゥーハ、これはスペインで1990年代初頭に始まったテクノポリス計画です。より最近の例としては中国・四川省の綿陽。これらは皆、非常に野心的な事例です。

15年ほど前、マヌエル・カステルと私は、こうした各地の先端科学技術の集中した場所について調べてみました。結論と言えることは、幸運に恵まれた事例もあるし、非常に成功している事例もあるが、総じて長い時間がかかっているということです。つくばを例にとれば、構想が完全に現実のものとなり、成熟するまで50年かかっています。

結局、このような開発事業は、たとえ今は成功しているように見えなくとも、長い時間をかけて大切に育てていくことが重要だ——これがわれわれが導き出した結論でした。有機的な成長のプロセスには時間がかかるものなのです。

ごく最近の素晴らしい例はシンガポールのワン・ノースと言ってよいでしょう。島の西側にあり、植民地時代にイギリスが住宅地区として開発したところですが、今は、イギリスのザハ・ハディド設計の見事な建築が立ち並んでいます。この地区では、とくにITとバイオサイエンスの分野でのイノベーションを推進しています。そのために、まずはきわめて質の高い環境を創出するという計画があったわけですが。

シンガポールのワン・ノースが将来どうなるのかは、大変興味深いことです。ワン・ノースは、今やっと再開発が終わろうとしている、まったく新しい地区であり、ここに移転が決まっているのは、今のところほとんどが政府系機関やシンガポール国立大学です。今後、企業を海外から誘致できるかどうか、地区の将来を左右する重要なポイントになってくるでしょう。

しかしながら、ワン・ノースのような都市開発について、私は疑問を抱いています。これは都市が進むべき理想の姿なのでしょうか。たしかに、既存の強大な多国籍企業を招き入れるためには有効な開発かもしれませんが、しかし、新しい人材、イノベーションを可能にするような人々を引きつけることができるでしょ



● 15

うか。イノベーションはもっと違う方法で育成すべきではないでしょうか。ですから、ワン・ノースは決定的なモデルではない、一つのモデルにすぎない、と私は考えています。

もう少しこの点についてお話ししましょう。世界各地の大都市を見ていくと、新しいタイプの都市開発が始まっていることに気づきます。それは多中心的(ポリセントリック)と言えるような開発です。まず、昔からのビジネスの中心地区があり、それとは別に二次的なビジネス中心地区、いわゆるCBD(セントラル・ビジネス・ディストリクト)が開発され、さらに、三次的なCBDも開発される。すなわち、ビジネスの中心地区が一つではなく、二つ、三つと複数あるのです。また、都市の周辺に———アメリカではエッジ・シティと呼んでいます———ある特定の活動が集中して、その活動の中心地を形成する。たとえば、大型のアリーナや劇場などができて、大衆的なショーやパフォーマンスの中心地となり、そこは spektakular の都市などと呼ばれるようになる。このようにして、複数の中心部を持つ多元的な都市の形態が形成されつつあります。

多くの都市で、この方向に動いていることは明らかです。さらに、さまざまな活動が地域内のそれぞれの中心地で行われる、多元的大都市圏が形成されつつあります。

スペインのバルセロナの例を挙げましょう。東部地区は産業不振のあおりを受けて、完全に荒廃した工業地区になっていましたが、1992年のオリンピック開催に合わせて、地区の再建が始まりました。オリンピック選手村の建設などが始まり、この頃から東部地区全体が次第に変わっていきました。

その結果、昔は何もなかったところに、新しい活動の空間が生まれました。それが完成したのは2004年のことです。フォーラムが開かれたのですが、これは知識のオリンピックと言ってよいかもしれません。141日間、今日のような形でのセミナーや会議が連続で開かれて、世界的に重要なテーマについて聴衆も参加しての議論が続きました。

ブラジルの有名な都市計画の専門家、ジャイメ・レルネルをブラジルのクリチバから招いて、こんな大仕事をやろうとするのは、大きな賭けでした。でも、レルネルはやって来ましたし、リチャード・ロジャーズも、その他の有名な都市計画家もやって来ました。フォーラムは参加者300万人、来場者600万人を数えました。新しい国際会議場もフォーラムを機にオープンしました。そして、市の東側全体の再生をもたらしました。バルセロナでは、今なおこの再生と変化が続いています。また、新しい鉄道駅の周辺を含む広範な地域の再開発が進行中です。

昨2008年、同じスペインでサラゴサ万博が開催され、商業的にも大きな成功を収めました。都市と水をテーマにした博覧会で、この川の中州のような島も会場となりました。新しい鉄道駅のそばです。これはデジタルウォーター・パビリオン、その向こうにザハ・ハディド設計の橋が見えます。[16]

われわれにとってより重要な意味を持つのは、万博は何を遺産として残すのか、ということです。サラゴサの場合、都心部と万博会場を最先端のIT空間の通路、デジタル・マイルで結び、約2キロに及ぶデジタル化した環境を提供しました。そして、今度はそれを基にして、新しい活動、デジタル・バウハウスをやろうとしています。

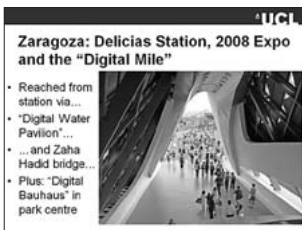
デジタル・バウハウスは建設が始まったばかりですが、新しいタイプの技術系の大学と言ってもよいでしょう。ここには地元の子どもや大人に開放された施設もあり、そこでは新しいテクノロジーと遊んだり、クリエイティブな体験をすることができるのです。こういう活動もデジタル・バウハウス計画では重要なものとして位置づけられています。[17]

サラゴサのデジタル・バウハウスは、MITの研究グループも「新世紀都市」モデルの一つとして取り上げています。横浜の皆さんにとっても興味ある事例ではないかと考え、ご紹介しました。

ところで、サラゴサ、バルセロナ両都市に共通していることですが、スペイン政府は新しい超高速鉄道建設のために巨額の投資をしています。このことについて、是非お話ししておきたいと思います。

先ほども触れましたが、バルセロナの都市計画では、新しいラ・サグレラ駅周辺の再開発も重要な再開発計画の一つです。ラ・サグレラ駅は2012年オープンの予定で、これが3年後の予想図です。[18]私がこの写真を撮ったのは2か月前ですが、そのときは工事がまだ始まったばかりでした。

スペインからのたいへん面白い事例だと思います。交通技術が人の交流を促進するために使われている点が特に面白い。高速鉄道はフェイス・トゥ・フェイスの対面型コミュニケーションを促進することになり、デジタル化とともに新しい経済を支える基盤になると考えられます。2012年にはこの計画が現実になり、スペインの超高速鉄道システムはピレネー山脈を通して、フランスの鉄道システムとつながります。



● 16



● 17



● 18

イギリスでも同じような計画が進行中であることにも短く触れておきたいと思います。2012年に開催されるオリンピックに合わせて、新しい高速鉄道が開通しますが、これをロンドンの都市再開発にも利用しようとしています。

とりわけ、産業が衰退して荒廃したロンドンの東部地区を、新しいハイテク製造業が集中する、クリエイティブな場所にするためにも鉄道を活用しようと考えています。

同じような都市再開発が、ロンドンで最近オープンしたばかりの駅の周辺地区でも推進されています。ここは、さまざまな活動が可能な、いわゆる多目的地区として開発されています。

ここ横浜にも新幹線という超高速鉄道が通っているということを、今思い出しました。実際、新横浜駅は最も初期の超高速鉄道駅の一つで、45年くらいの歴史がありますね。新横浜駅周辺地区は高速鉄道によって開発された目覚ましい成功例だと思います。

皆さんに最後の質問をして、私の発表を終わりにしたいと思います。質問というのは、東京周辺地域という広いエリアの中で、クリエイティブな場としての横浜の役割をどう定めていくのかということです。市の端を通る新幹線や都市のエネルギーを使って、すでに皆さんは、受け身的な創造活動の消費とアクティブな創造活動を推進していらっしゃる。では、これらの要素を融合して、横浜は21世紀型のクリエイティブシティのモデルになるのでしょうか。ご静聴ありがとうございました。

社会システムとその変革

●
2009年9月4日[金] 15:30~18:00
関内ホール【大ホール】



○——コーディネータ

加藤種男

KATO taneo

公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団
専務理事
アサヒビール芸術文化財団事務局長

○——パネリスト

ピーター・ホール

Sir Peter Hall

ロンドン大学バートレット校教授 | イギリス

モンテ・カセム

Monte Cassim

立命館アジア太平洋大学学長

青木 保

AOKI tamotsu

文化人類学者 | 前文化庁長官
青山学院大学大学院特任教授

伊東 豊雄

ITO toyo

建築家 | (株)伊東豊雄建築設計事務所
代表取締役

野田 由美子

NODA yumiko

横浜市 副市長

パネルディスカッション1趣旨説明

加藤 種男 (公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団

アサヒビール芸術文化財団事務局長)

早速、パネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。

先ほど、ピーター・ホール教授が高速鉄道というお話をしておりましたが、高速鉄道以上に、今はジェット機のようなスピードのあるお話を受けて、整理をしつつ、話をしなくてはならないので結構大変なのですが、今日は全体のテーマが「社会システムとその変革」となっております。

初めに簡単に、これからのセッションのご案内をさせていただきたいと思います。今、経済的な危機、あるいは社会的な危機と普通言われておりますが、こうした状況は単なる一過性の危機というよりは、ある意味で大きな構造的転換期にあるのだらうと思います。こういう時代には、さまざまなシステムの変換を伴わないで、ただ経済振興策だけで社会の再生を図っていくのは難しい点があるのではないかとというのが、私どもの問題意識です。現在、横浜では、ご案内のとおり「文化芸術創造都市・横浜」という考え方を前面に出して取り組んできているわけですが、この大きな目的はコミュニティ自治の推進ということがあるかと思っています。市民すべてが創造的になっていくことが一つのゴールではないかと考えています。

そうしたコミュニティ自治を進める上で、新しいコンパクト経済といった概念を、本日はできれば議論してみたい。また、市民の創造性を高めるということで、これまで文化の振興を図ってきているわけですが、この進め方についても議論できればと思っております。

文化というものを議論するとき、ややもするとこれまでは輸入文化中心の、いわゆるハイカルチャーに限定され易かったような気がいたします。これはピーター・ホール教授もおっしゃっておられるオペラハウスやミュージアム、コンサートホールといった、いわゆるハイカルチャーの世界というのもの、もちろん重要なだけけれども、それだけではない、もっと幅広い文化のとらえ方をすることも重要ではないかと思っています。

そうした中で、日本文化の持つ幾つかの特色に、これから焦点を当てていく必要があるのではないかと。ある意味で、生活のすべてが創造的かつ持続的であるようなシステムの再生。そうしたものが、現代の文化論として世界にわれわれが提案できるものではないかと思っています。

アートとテクノロジーの結婚ということをおっしゃっておりましたが、こういうものをもともと、デジタルではないかもしれないけれども、アナログの世界で実現していたのが日本の文化で、それが今日、日本のメディアアートとして花開いている面もあるのではないかと思っています。

伊東豊雄先生が、ブリーフィングの中で「閉ざされた空間で完結するのではなく、さまざまな空間の境界が大事なのだ。そうしたものを重視していくのも日本文化の特色だ」とお書きになっておられますが、近年の大規模開発を見たときに、われわれが何となく味気ないというか、居心地が悪い、あるいは、居場所がないと感じるのは、そうした境界を無視して、閉じられた空間だけを作ってきたということにもあるかもしれません。

今日、文化を議論したり、あるいは、創造都市を語るときに、どうしても陥りやすいドグマがありまして、その一つは文化か福祉かといったような二元論的な考え方です。こうした二元論を、われわれとしては脱却したいと思っております。

文化というものは、必ずしもその世界だけではなく、福祉や環境、あるいは都市のすべての社会のシステムにおいて、大きな役割を果たしていく。そういう意味では、社会の課題解決に役立つ文化という考え方もあるのではないかと思っています。われわれが横浜市の中で黄金町や寿町に特に着目をして、こうしたところで文化活動を通して都市の再生を図ろうというのも、こうした観点からだといえると思います。

横浜には創造都市に先立つ、実は長い先駆的な実験事例が続いてきたと思います。それは、一つは都市デザインという考え方を持っていたということ。それから、もう一つは、元町商店街に見られるような先駆的な試みといえればよいかと思っています。元町商店街は、徹底的な、ある種の商店街自治といえますが、コミュニティ自治を進めてこられておりますし、その中で製造・販売の一体化、小規模店舗の維持といったことを中心に、ある種のコンパクト経済の先駆者ともいえるのではないかと思っています。

そういう意味で、今日はこうした横浜の事例を踏まえながら、日本とアジア、そして欧米まで入れた3極を比較検討するのにふさわしい先生方をお招きしております。モンテ・カセム先生は、アジアのご出身で

いらっしゃいますし、日本の文化にも大変造詣が深くていらっしゃいます。また、青木保先生は、特にアジアの研究を深くしてこられた知見をお持ちです。そういう意味で、日本とアジア、さらには欧米を加えた3極の比較ということができるのではないかと。そうした中から、横浜発ということを中心にピーター・ホールさんがおっしゃっておられましたが、横浜発をわれわれが真剣に考えていく上でどういうことができるかについて、お話をいただけたと思います。

また、伊東豊雄先生は、もう言うまでもなく世界的な建築家でいらっしゃいます。特に、空間ということについて、都市ということについて、非常に長く独創的なお考えを披歴して、具体的に提案をしておられます。そうした先生方からご覧いただいて、横浜はどうあるべきかといった話をさせていただこうと思っております。

そのお三方のプレゼンテーションの前に、私どもの進めている「創造都市・横浜」の担当副市長でもある野田副市長から、まず横浜はどこまで行こうとしているのかといったことから口火を切っていただこうと思っております。では、よろしくお願いたします。

クリエイティブシティ・ヨコハマの挑戦

野田 由美子(横浜市副市長)



野田 由美子
NODA yumiko

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、横浜市副市長の野田由美子でございます。

今日は10分お時間をちょうだいしまして、二つのこととお話したいと思っております。横浜市のこれまでのクリエイティブシティの取組。そして、クリエイティブシティ・ヨコハマのこれからということで、これまでの成果を振り返り、そして将来に向けて展望をしたいと思っております。

横浜のクリエイティブシティの取組をお話しする前に、ちょっと横浜市は一体どういうまちか。市民の方がたくさんいらっしゃると思っておりますけれども、今日は海外からお見えの方も多くいらっしゃると思っておりますので、横浜市は一体どんなまちなのかというのをちょっと見ていただきたいと思います。

これは恐らく、横浜の最も典型的な美しい写真ではないかと思っております。**[01]** 港を囲み、富士山が、ちょっとこれは見えにくいかもしれませんが、富士山があります。そして、日本で一番高い高層ビルであるランドマークタワーがあり、そして、高層ビル群があります。そして横浜には、日本最大の国際コンベンションのファシリティがあります。昨年はアフリカ開発会議、そして来年にはAPECという国際会議が開催されます。このように、横浜は非常にモダンなまちとして、今、日本第二の都市に発展したわけです。367万人の人口を擁する都市です。

ところが、今年開港150周年の記念事業をしておりますけれども、これはわずか150年前の横浜の姿です。

[02] わずか100戸しかない寒村でした。アメリカからペリーがやって来て、そして日本の開国を迫り、その結果、横浜という港が開かれ、これが都市・横浜の誕生、出発点になったわけですので、横浜の都市としてのスタート地点というのがここにあるわけでございます。

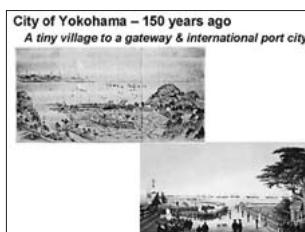
ここで横浜のクリエイティブシティの取組を振り返ってみたいのですが、まず、本格的に始動したのは2004年です。2004年に、将来像としてクリエイティブシティ・ヨコハマというものを掲げまして、創造性が都市の未来を拓くものである。それを最も顕著に表現する分野である文化芸術を経済の活性化や、そして魅力ある都市づくりへとつなげていこう。特に、都心部を活性化していこうという目標が掲げられました。

具体的には四つ、アーティストやクリエイターが住みたくなる環境を作っていく。二つ目に、創造産業のクラスター(集積)を作っていくということ。そして三つ目に、魅力ある、横浜ならではの地域資源を活用していくということ。そして、四つ目には市民が主導する文化芸術の都市を造っていく。こういう目標を掲げまして、推進体制として文化芸術都市創造事業本部という専任の組織を作って、2004年に本格的なスタートをしたわけです。

そして、2006年にはナショナルアートパーク構想ということで、先ほどちょっと写真を見ていただきました、まさに横浜の原点である港を囲みまして、「開港都市」であるという横浜の特性、歴史、文化を最大限に生かして文化芸術活動を誘導し、そして産業の育成であるとか観光資源を発掘して、都市の活性化に結び付けていこう、横浜の発展に結び付けていこうという構想が2006年に発表されて、その後、今日ま



01



02



● 03



● 04



● 05



● 06

で取組を進めてきております。特に、この都心部、港ですけれども、市民が集える、市民が憩える場所にしていきいたいといったビジョンが掲げられています。

ご案内の方も多くいらっしゃるかもしれませんが、象の鼻という、これはまさに横浜の開港のシンボル。ペリーがやってきて、そこで貿易がスタートしたと。この昔の波止場ですけれども、[03]象の鼻の形をしていまして、ここにも象の鼻の形をした絵がありますが、横浜のまさに原点であるこの場所を、開港150周年を記念に再生しようということで、象の鼻パーク、公園という名前を付けて再生をしました。

これが今年、開港150周年を機に、再生された象の鼻パークでございます。[04]まさに、この象の鼻の形をしたエリアを、市民が楽しめる場として造り上げた。右側は夜の風景です。

このほかにも創造界限ということで、さまざまな横浜の地域資源、横浜といえまさに開港の都市であったわけで、倉庫があり、そして西洋の建築物があり、そうしたものを生かしながら転用して、アーティストやクリエイターの活動の場、そして市民との交流の場にしていこうということで、さまざまな支援をしてまいりました。

[05]これはヨコハマ・クリエイティブシティ・センター(旧BankART1929)とされていますけれども、昭和初期の銀行の建物を転用してアーティストの創造活動の場、そして市民との交流の場にしています。右側の写真も同様に、これは昔の倉庫ですけれども、これを創造拠点として整備を図っています。また、担い手の活動の支援ということで、相談窓口を一元化して、アーティスト、クリエイターの方の相談に乗る、支援をするということで、アーツコミッション・ヨコハマというものも作ったりしております。

それから、産業の育成のために、例えば学校も誘致しています。東京芸術大学の大学院の映像研究科を誘致いたしまして、これも同様に昭和初期の銀行の建物を使っていただいて、そこを映画の専攻、それからメディアの映像専攻の校舎として使っていただいています。[06] こういう教育機関の誘致というものを核にして、創造都市の展開をしているということです。

それから、映像文化の発信という、これはこれから実際にやるのですけれども、「映像文化都市・横浜」ということで、映像文化を発信していこう。映画、そしてアニメ、さまざまな映像を対象とした映像のフェスティバルを開こうということです。

それから、先ほども加藤先生からお話がありました黄金町、アートによってまちを再生するまちづくりということで、これは非常にユニークな取組ではないかと思えます。かつて違法飲食店が立ち並んだ黄金町というエリアを、アーティストが活動し、そして市民との交流の場となるような形で再生しております。

昔、違法飲食店が並んでいたときの場所が、それが今は人が歩けるような、そして「黄金町バザール」という、買い物を楽しめるようなイベントも行っております。実は先日、「黄金町バザール」が始まりましたけれども、こういった取組をして、まちを再生していくということもしています。

それから横浜トリエンナーレを2001年から3回開催しておりまして、市民が参加して、こうした国際現代美術展というものも開いております。

そして、市民が主導する文化芸術のまちづくりということで、市民、そして子どもたちにも、アートというものに親んでもらおうという取組も、さまざま進めているところです。

これまでの成果としまして、今簡単に申し上げましたけれども、都心、臨海部において、こうした創造界限を形成する。そして、市民が集える場所を作っていく。そして、担い手、アーティストやクリエイターという人たちが、創造活動ができるように支援をしていくということ。そして教育機関を誘致し、まちの再生をし、そして市民が参加できるような形でこれまでやってきました。

実は今日、青木先生がいらっしゃるのですけれども、2008年3月に、横浜市は文化庁から文化芸術創造都市部門ということで第1号の表彰をいただきました。これは文化芸術の力によって市民参加で地域の活性化に取り組んだ。そして、顕著な成果を上げたということで長官の表彰をいただきまして、一定の成果が出たのではないかと自負しております。

次に、「クリエイティブシティ・ヨコハマのこれから」ということで少しお話をします。問題意識としては、グローバル化によって都市間の競争というのはますます高まっているということです。これは、国内のみならず海外、特にアジアの、中国や韓国、こうした都市との競争が非常に厳しくなっている中、都市というものは、むしろ企業や住民から比較されて選ばれる状況になっている。では、その中でどうやったら横浜が選ばれるのだろうかということを、今、真剣に考えているわけです。

とりわけ、日本国内においては人口が減っていく、縮小社会に入っております。その中でパイを奪い合う

ということもあるわけでございまして、どうやって横浜というまちが魅力的で、そして人から、企業から、あるいは観光客から選ばれるかということを考えていかなければならないと思っております。

では、選ばれる都市になるためには何が必要なのだろうか。そして、市民が生き生きと生活できる、市民力が発揮される、そういったまちになるためには何が必要なのだろうかということを考えますと、これはやはりその都市ならではの歴史・文化、独自性・アイデンティティといったものに徹底的にこだわることが、私はとても重要ではないかと思っています。

そして、自分たちが住んでいるまちに対して誇りを持って、プライドを持って、愛着を持つということが、まさにとても今重要ではないかと思っています。そういう誇りがあって、愛着があってこそ市民力が発揮され、そして地域のために、都市の一部のコミュニティの活動に参画していこうというものが生まれていくのではないかとと思っています。

われわれ横浜市民はどこから来たのか、横浜という都市はどこから来たのか。「Where did we come from?」[07]と書いてありますけれども、一体どういうDNA、歴史、アイデンティティを持ち、そして、われわれはどこに行くべきなのか。こういうことを開港150周年というこの機会にぜひ市民の皆さんと考え、そして一緒にこれからの道を歩んでいきたいという思いがあります。「ハマっ子」という名前がありませんけれども、一体その「ハマっ子」はどういう市民なのか、どういうDNAを持っているのかということ、市民の皆さんと一緒に議論しながら作っていきたいという思いを持っています。

これは実現するプロジェクトとして実は今進めているのですけれども、[08]市民参加型の都市ブランドプロジェクトというものを、昨年の終わりからやっています。これはCivic Pride(市民の愛着と誇り)というものを醸成するための、市民参加型で都市ブランドを作っていくというプロジェクトで、「イマジヨコハマ」と呼んでいます。

この目的は二つあります。市民が誇りと愛着を持って、自分が都市の一部である、コミュニティの一部であると実感できるような都市を作りたいということ。そして、市民が一人ひとり持っている個性、創造性というものが発揮されて、そして相互に尊重し合うような都市というものを目指して、市民の参加によってブランドを作る。

これは実は30万人を目標にしております、横浜は367万人の市民がおりますけれども、大体1割ぐらいの市民の方に参加していただいて、横浜は一体どういうまちなのか、横浜市民、「ハマっ子」はどういう市民なのか。われわれはどういう都市を目指して、これから50年、100年進んでいくべきなのか。横浜をどんなまちにしたいかということ、30万人とともに考えて作り上げていこうというプロジェクトです。ここに写真がありますがけれども、最初に890人のボランティアが中核になって、そしてつながりインタビューといった形で、いろいろな人に横浜のまちについて考えようということで、今、活動、ムーブメントを進めているところです。

「クリエイティブシティ・ヨコハマ」、先ほど申し上げましたようにこれまでさまざま、文化芸術の拠点、創造界隈を作ったり、クリエイターやアーティストを支援するということで進めてきましたけれども、今後は文化芸術ということ、先ほど加藤先生からもお話がありましたけれども、文化芸術というその狭い領域にとらわれずに、それをもっと広げていく、コラボレーションしていくことに力を注いでいきたいと思っています。

文化芸術とまちづくり、そして産業。先ほども福祉というお話がありましたけれども、例えば文化と福祉の分野をどういふふうコラボレーションさせていくのか。あるいは、文化、アートの力を使って商店街をどのように再生していくのか。どうやって製造業に文化、アートというものを結び付けていくのかという文化と産業のコラボレーション、そして、文化芸術と市民の創造性を使って、私たち横浜のまちをどういふふうに進めていくかということ、ぜひ進めていきたいと思っています。

それからもう一つは、これまででは都心部、まさに私たちの開港のDNAというか、シンボルである港を中心に、創造界隈というものを整備してきました。しかしながら、創造都市、クリエイティブシティというものは港のものだけではなくて、港に行かないとそういったクリエイティブティが感じられないということではなくて、やはり全市、郊外部にもそういうものを展開し、日常生活の中で創造性が発揮できる。あるいは、クリエイティブティというものが感じられる、心の豊かさが感じられる。ぜひそういうものにしていきたいと思っています。

文化芸術というものが市民の生活の中で当たり前のように感じられる、そういうまちにしていけたらいい



07



08

いのではないかと考えています。これによって、ぜひ横浜を世界クリエイティブシティのモデルという形で展開できればいいと思っています。

特に、横浜のクリエイティブシティの特徴として、367万人の市民の参加、力ということが非常に大きいと思っています。単に文化芸術都市というのが芸術家のものではなくて、市民のものとして、市民と一緒に横浜のまちを作っていくということを横浜市として目指しています。どうもありがとうございました。

(加藤)大変簡潔に、かつ世界の創造都市のモデルに横浜はなるのだという意気込みについてもお話をいただきました。ありがとうございます。私どものこの会議の目的は、横浜のクリエイティブシティ、創造都市をどのように進めていったらいいか。新しい知見を得ようとするものです。

皆様方におかれましても、それぞれの現場で、横浜に必ずしも現場をお持ちでない方にとっても、自分たちのエリアで新しい地域創造を図っていくヒントが得られればということで進めているわけですが、次にお話、プレゼンテーションいただきますモンテ・カセム先生は、立命館アジア太平洋大学の学長も兼ねておられます。

この大学は別府市にございまして、実は横浜以外にも創造都市の試みを大変進めている都市が、日本の中にも幾つもあります。その一つが別府市で、そうした実験も含めて、創造都市の地域開発の現状と可能性、あるいは、現在の創造産業の可能性、また、さらには学長というお立場から、大学とその他のセクターとの連携といったことを含めてお話をちょうだいできればと思います。よろしくお願いたします。

社会システムの変革 アジア太平洋時代の到来と創造産業の可能性

モンテ・カセム(学校法人立命館副総長、立命館アジア太平洋大学学長)



モンテ・カセム
Monte Cassim

横浜市が開港して150周年ということ。市民の皆さん、副市長、おめでとうございます。先ほど副市長が語った夢を実現できる元年になればいいなと、心から願っています。

諸先生方や副市長のお話にも、加藤先生の話にも、横浜市がやってきたことを今後新展開して活力あるものにするには、国際社会抜きではできないというニュアンスが入っていたのではないのでしょうか。その国際社会とはどんなものかということ、少し語ってみたいと思います。

これからアジア太平洋時代が到来すると思います。それは何ものなのか。そして、その中で創造産業をどう位置付ければいいのか。それは日本の中でどんな変革を起こすものになるか。創造産業というのは人が中心なものですから、やはり人をどういうふうに大事にしていくかということが課題です。その点で、人を大いに扱う大学というものをどう利用すればいいかということでお話しさせていただきます。

アジア太平洋の時代というものは、皆さん画期的なものですよ。国連アジア太平洋都市会議(YLAP)という会議を、25年ぐらい前でしようか、ここで開いて、私がアジア、アジアと語っていたときには、あまり誰も信用していなかったと思うのです。だけど今、アジア抜きに世界のさまざまな問題は解決できないのは明らかです。

だから、この時代の一番大きな意義は何であるかということを考えてみたいと思います。その次は、世界が今直面しているあらゆる課題、財政問題であろうが、環境問題であろうが、少子高齢化の問題であろうが、すべてについてアジア抜きに語れないということもお話したい。3番目に、このアジア太平洋時代に、やはり戦争から抜け出せないということが人類の大きな課題だと思うのです。そういう意味でも平和宣言を一番早く、反核運動も早くやった横浜市をはじめとして、平和と繁栄の時代を招くことは可能かということを考えてみたいと思います。

世界の人口の過半数がアジア太平洋地域にいます。「ボックス・ブリタニカ」や「ボックス・アメリカーナ」とは違って、世界の少数の人間の価値観を世界の過半数が受け入れるのではなくて、世界の過半数の価値観を世界の価値観にする時代だということです。

これが何を意味するかというと、世界の過半数の人口が単一なはずがないということです。だから、まず必然として多様性を受け入れなければいけないということです。その中で、われわれの経済産業の市場も、グローバル化の下、このアジア太平洋時代の到来の下で巨大なものになりますけれども、非常に選別された、きめ細かい、多様なマーケットにもなります。

それに応えるためには、この創造産業が一つの鍵ではないかと私は思います。やはり多様性を受け入れて、創造性を生み出して産業を創造すること、市民生活を豊かにすることが課題です。

次に、われわれの直面している世界規模の課題をどう解決すればいいかということを考えてみると、今の財政危機、金融危機を見て感じるのは、まず实体经济をもう一回見直すべきではないかということです。その实体经济は、きちんとした、顔が見える範囲のものになる場合が多いと思いますので、日本でいうと市民が誕生する大きな場所になるし、また日本は先進諸国の中でも数多くの地方銀行を持っている国でもあります。その地方銀行というのは、もともと顔が見えるところに貸し出すものであるから、その原点に戻って、この实体经济と創造産業をどう支えるかということを考えるべきだと思います。日本中の地方銀行の貯蓄高から貸出高を引いた額を計算すると、数十兆円にもなり、それがこの産業の保険役、また、貸出の原点になる可能性は大いにあります。それをぜひ考えてもらいたいと思います。

また、今の環境危機という問題もある。地球温暖化も大きな問題ですが、特にこのアジア太平洋地域はすごい勢いで伸びているので、生物の多様性も失われつつあります。しかし、バイオ産業の世紀では、遺伝子の多様性の損失は最も有力な産業のネタを切り捨てているに等しいのです。ですから、気候変動と生物多様性の損失に対して、われわれはどう貢献できるかということが2番目の課題です。

横浜市は日本の中で唯一、自分の市民を食わせる農業都市でもあるわけです。それを忘れてはいけません。ですから、先ほど副市長がおっしゃった、都心部から始めたクリエイティブシティが周辺部に行くのであれば、ここを課題にしていかれてはどうでしょうか。そうすると、食の安全から何かを始めれば、市民に身近になります。

3番目には、少子化・高齢化が進む人口減少の社会をどうするかということです。経団連の中の議論でも、2030年から2050年の間に、日本では3000万～5000万人の人口が減少するのではないかとされています。そうすると、9000万人から7000万人に人口が減る。こうした背景があり、今、日本が移民を迎えなければいけないのではないかとされています。1000万人の移民を増やす計画があります。

皆さん、単純な計算をしてみてください。例えば人口が3000万人減って1000万人入るとしたら、その1000万人は3K移民にはならないのです。だから、従来のヨーロッパ、アメリカの移民の対象と違った対象になります。この1000万人が3000万人の富かそれ以上を生み出さなければいけないのです。そのためには、高学歴、高付加価値が生み出せるような人々でなければなりません。その縮図が私の大学ではないかと思うのです。

今、私の大学には、88か国から学生が来ており、学生総数の47%を占めています。世界のすべての大陸から来ています。これもアジア太平洋時代を表しています。アジア太平洋時代というのは、アジア太平洋地域の域内の人々のためだけの時代ではないのです。世界の皆さんの平和と繁栄を促進する時代なのです。だから、アジアの方々が域外の方々とどう付き合うかということは、非常に大事な課題になります。その縮図がわれわれの大学であれば、そこへ皆さんも来て、交流して、学んでいくものが幾分かあるのではないかと思います。そういうことを横浜市と別府市が共同で行えないだろうか、何かを生み出して今後の日本社会形成に貢献できるのではないかと考えています。このようなことも念頭に置いて、創造都市のネットワークを作ることができればよいとも考えています。

平和と繁栄への道を開いていくためには、先ほども申し上げたように、支配や排他主義を超えていかなければなりません。横浜の平和や反核運動の取組等々を見ても、非常に自由主義、人道主義な価値観を持つ、民度の高い市民がいるところでは、そこをベースにして、創造産業にも連動して、世界の平和と繁栄を到来させる、大事な拠点になるのではないかと思います。

そこでは、やはり人材の育成が成功の鍵になります。これは地球規模の課題でもあるのですが、創造性豊かな人間が産業のイノベーションをどう促進するかと考えたときに、日本の企業は、それに見合うような組織構造を持っているかということが問題になってきます。

イノベティブな人間、革新性のある人間というのは、気まぐれな人間です。気まぐれな人間が、日本の組織文化がある大企業や、日本の行政機関の中に入って伸びますか。横浜市は違うかもしれませんが、苦しいと思いますよ。そういうときにどうすればいいかということも課題です。

大学を使ってください。大学は、気まぐれ人間を扱うことに長けたところですから、そういう点を活用すればよいのではないかと思います。創造的な産業基盤を作るのであれば、気まぐれな、創造豊かな人間を、どう生かす環境を作るかということは大事です。大学、行政、産業界のパートナーシップで、ぜひやってみ

たいと思っています。私たちも小さな試みを幾つか大学の中でやっています。

副市長もおっしゃったように、創造性豊かな産業を生み出し、かつ文化的なダイナミズムが各家庭まで浸透することは大事だと思います。ルネサンスがあればほど画期的な時代で、なぜ歴史の中に残ったかという、ミケランジェロやダ・ヴィンチがいたからだけではないのです。市民が自分の手で明日の歴史や今日を作っていると自覚をしていたからだ、と歴史家も語っています。そして、私も本当にそうだろうと思います。私が学生時代から感じているのは、横浜市民の民度はこれに匹敵するようなものだという事です。皆さんには、頑張って、民度の高い市民運動を世界的に展開していただきたいと思います。問題は、そうした運動を支える大きな社会経済的なシステムをどう作るかということだという感じがいたします。その道開きを今年から始めたらいかがでしょうか。それがクリエイティブシティ・ヨコハマの将来ではないかと思えます。

先ほど申し上げたように、移民国家日本になろうとしている今日、高付加価値の、創造性豊かな、時々気まぐれな人間をどう受け入れる社会基盤が作れるかどうかがきわめて重要です。本当に日本が今そういう背景に取り組めるような社会であるかどうかと考えると、そうではないかなとも感じます。

例えば、世界的にあんなにも知られている漫画やアニメやゲームのクリエイターが、この国ではまだ社会的に不安定な雇用状況にある方々が多い。彼らを広く受け入れるような組織体が少ないのです。だから、彼らをどういうふうに大事にするべきか。メディチ家はもう日本には存在しません。日本は遺産相続税によって全部吸い上げます。だから、誰がそれをやるかという、やはり市民と行政と企業のパートナーシップでしかできないでしょう。それも行政主導ではなく、個別に個人ベースで、各人の姿勢、優位性、豊かさ、そういうものを引っ張り出せるような社会環境を作らなければいけません。

これは気まぐれなゲームクリエイターだけの話ではありません。日本の文化財を支えている宮大工や左官屋さん、そういう方々も必ずしも、しっかりとした雇用条件の下にあるわけではありません。どこかでこの社会が歪んできたのです。それをどういうふうに正すべきかということも、このクリエイティブシティの裏にある課題ではないかと思っています。

私が若いとき、37年前には、原宿の裏道の竹下通りには学生の安い下宿が並び、1万1000円で6畳の部屋が借りられました。今、あそこはコスプレやアニメという新文化を発生する拠点になっています。カラス族やタケノコ族や、数多くの若い支持者を対象にしたファッションクリエイターが誕生した地域でもあります。だけど、もうそこにファッションクリエイターはいません。なぜですか。なぜそうなったのですか。地上げ屋が入って、彼らがそこにいられなくなるような構造になったのです。

今、横浜市に言いたいのは、クリエイターたちを追い出すような構造が日本の都市計画の基盤としてある、ということです。それを変えるには、やはり開発利益を還元すること、クリエイターたちにどう戻せばいいかということを考えなければいけません。開発による利益の還元基金を作ることは可能だと思います。まだまだ区画整理の時代で、まだまだ日本の都市行政があります。そこから早く卒業していただきたい。そうすれば、横浜市がクリエイティブシティ・ネットワークの国際的ハブになるでしょう。ぜひそこを目指して、次の5年、10年の基盤づくりに取り組んでいただきたいと思います。

最後に、私の大学での取組をお話して、発表を終わらせていただきたいと思います。日本の未来をのぞいた、小さな窓のような感じがする大学です。2020年の日本の社会や日本の大学の教室は、こういう顔ぶれのものになるのではないのでしょうか。[01]

私の女房はイギリス人ですけれども、彼女が子どものときには、自分の田舎の小学校には白人の子たちしかいませんでした。けれども、30年後に私の子どもが同じ田舎の小学校に入ったときには、4人に1人、肌の色が違っていました。

つまり、イギリスは30年から40年かけて、国土全域に多文化を広げたのです。それと同じようなことが、日本の20年、30年先にも起きるのではないかという気がいたします。その先行事例として、このクリエイティブシティがあるのではないかという感じもしています。

この多文化環境の中に育つ学生諸君が、こういったパフォーマンスを春から秋まで毎週行います。[02]自分の国の文化芸術のパフォーマンスを他国の子どもたちも受け入れながら、非常に活力のあるパフォーマンスを行います。これを遠くから市民が見に来ます。リピーターも来ます。子連れで来ます。パフォーマンスはキャンパス内にとどまっているわけではありません。この舞台芸術を外に出して、そこで得た収入によって、市民との交流活動も行っています。市民と単なる交流をやるだけではなくて、どこ



01



02

かに被災があったときに募金活動をやったり、その募金活動の裏にあるのは、こういう文化芸術的なパフォーマンスです。

また、エイズの子どもの自立を促進するためのファッション産業を生み出して、その中から出る資金で、この子どもたちが継続的に学校に行くような構造を作っている学生NPOもあります。そういった創造力、現場力、人間力が一体化したものが、このキャンパスの中にあると感じます。

私が人間力で最も大事だと思うのは、世界のどこかで誰かが被災したときに、その痛みを自分の痛みとして感じることができる人間性です。その温かみが、我が大学が一番誇れるものだろうと思います。その誇りが、多分、創造性豊かなクリエイティブシティ・ヨコハマにもあるのではないかと感じています。それをどのように大事にしていくかということ、今後、課題としてご検討願いたい。

最後になりますけれども、創造都市を形成していくため、学生とまちが協力して行くいろいろな事業があります。後ほど、パネルディスカッションのパート2のときに語る機会があればお話ししますが、今回は

⑤番目のアートプロジェクトを一つだけ取り上げます。[03]経緯はここに書いてありますが、今年、「混浴温泉世界」というものを行いました。どんなものかと思われるでしょうが、これは女性と男性が裸で一緒になるということではなくて、皆さんがそうなったときにどんなことが創造できるか、——創造にとどめてほしいのですが——創造するとどんなものが可能になるかという問題を提起するものです。

まちの空き店舗が、困ったなと思っていたところから、こういう見事な画廊に変ります。[04]これはコーディネータの加藤先生も裏舞台にいたし、この企画を動かした福谷先生や牧田先生という、うちの教授2人も今日会場にきています。

大学近くに大きな別府観光港があるのですが、別府にはフェリーで来る人が多い。12万人の都市ですが、1200万人の訪問者がいます。だからすごいです。市民1人当たり100人が来る、100倍が来るのですから。その観光港にある、大きなアーティストの作品です。今回呼び掛けたアーティストの作品が、またこの空き家の中に出したときにどうなっているかということも書いてあります。作品を創造したのはアーティストですけれども、実際にペンキを塗ったり、作業をしったりしたのは、学生や市民のボランティアです。ですから、これは市民とクリエイターたちのクリエイティブシティの連携の中から生まれたものとして見てください。

[05]ここに書いてあるような中心市街地から始めた空き店舗の利用や、まちのリノベーションと文化創造をどう考えるべきかということですが、先ほど私は年間1200万人が来ていると言いましたが、それを1か月に平均すると100万人です。100万人というのは2か月では200万人です。このアートフェスティバルに来た人々が90万人です。だから、200万人の中の90万人が、このアートフェスタに来たということです。お金をあまりかけずに、市民がクリエイターと一緒にしてものを作ることが可能だという点も重要です。これはアクティブな観光とパッシブな観光の接点から出てくる新しい富です。これはホール先生の基調講演にもあった話だと思えます。

[06]この混浴温泉の湯煙にあふれている別府市の景観を、今度、世界遺産として登録できれば幸いです。私は今、市民が中心になってやっている研究会に、この前、知事も市長も出ていただきました。古いまちの文化遺産を会場にして開いたのですけれども、人があふれるぐらい満席で、やはり市民が自信を持ち始めている感じがします。これを今度展開したいと思えます。

右側の場面もアートフェスタの「どこかに行って踊ろうじゃないか」というプロジェクトで、踊りを探している人々です。ここの踊りはこんなものだよということは、皆さん見たら分かると思えます。

下の写真はマンホールの中に頭を入れているアーティストです。こういう事業を行いながら、私が一番賢いなと思ったのは、皆さんに発見の喜びを味わってもらうために、特別な交通対策など一切何もしてないということです。非常にいいかげんなことだとも思いますが、大成功です。皆さんが別府駅に、あるいは大分の飛行場に降りたら、地図を持って発見の旅をするわけです。安上がりで効果的です。こういうことを皆さんも考え出してください。必ずしも大型インフラを造るような金は要らないのです。この時代こそ、こういった創造性豊かな解決策が必要なのではないかと思えます。

私の大学でも、今、二つの学部、五つのインスティテュートや大学院が、いろいろなベンチャービジネスと一緒にラボをキャンパス内に作って、イノベティブな産業創出ができないかという話を始めています。そういうことをやりながら、皆さんが大学を活用すれば何ができるかという、金で買えない価値、やは

創造都市形成：市民主導型の事例、別府

- ① 2005年4月 BEPPU PROJECT発足
市民主導によるアートフェスティバルの開催を目的とした市民団体設立
- ② 2006年11月 「アートNPOフォーラム」を開催
全国のアートNPOや関係者に向けて、フェスティバル開催を呼び掛ける
- ③ 2007年10月 創造都市国際シンポジウムを開催
行動と発展を創造都市研究発表、星野浩 基調講演「アートコンプレックス構築を両立する」
- ④ 2008年8月～ 「platform」 芸術事業の実施
星野浩 基調講演「アートコンプレックス構築の課題」「platform」の設立、運営経緯
- ⑤ 2009年4月～6月 「混浴温泉世界」実施
2009年からの実施、「platform」などを発展させ、活動場を別府市全域に拡大

03

人財育成と大学の役割



04

【リノベーション事業の目的】

1. 中心市街地の空き店舗を活用した回遊拠点づくり
 - 一軒が数店の店舗ではなく、近接する空き店舗を中心回遊拠点を形成し、歩行者にやさしいまちをつくる。
 - 回遊拠点を活用して、市民が気軽に利用できるまちをつくる。
 - 必ずしもリノベーションに限定しない
2. 文化や福祉の町づくりを担っていく場や人を育てる
 - リノベーションを推進する際、社会実証事業として、市民が気軽に利用できるまちをつくる。
 - 回遊拠点を活用して、市民が気軽に利用できるまちをつくる。
 - 必ずしもリノベーションに限定しない
 - 必ずしもリノベーションに限定しない

05

人財育成と大学の役割



06

りこれではないかと思えます。「人生の充実した素晴らしい一時間は、無名の一時代より価値がある」と、ウォルター・スコットは言いました。それを皆さん信じて頑張ってください。ありがとうございます。

(加藤)カセム先生、ありがとうございました。先ほど、マンホールに首を突っ込んでいるパフォーマンスがありました。ちょうど私もあれをあついでで拝見して、何をやっているのだからよく分からないのですが、あの一つ一つの事柄は、もしかすると小さなことかもしれないのだけれども、横浜市民は民度が高いのだから、さらに人間力を発揮して、この創造都市の方向性をさらに明確にしろという激励をちょうだいしたものと理解いたしました。ありがとうございました。

次に、引き続いて青木保先生にプレゼンテーションをお願いしたいと思います。青木先生は、ちょうど先ほど野田副市長からも紹介がありましたけれども、横浜を創造都市の第1号の一つとして、5市を表彰いただいたときに含めていただいた、ちょうどその当時、長官でいらして、現在は大学の方で教鞭を執っておられますが、文化人類学者として、特にアジアの研究を長くしておられます。現代日本文化の可能性や、文化行政にも携わってこられたので、こうしたシステムの変革の可能性、また、アジアを中心とした国際的文化交流の展望などについてお話をいただけることとなっております。よろしくお願いたします。

プレゼンテーション

青木 保(文化人類学者、前文化庁長官、青山大学大学院特任教授)



青木 保
AOKI tamotsu

皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました青木でございます。

司会者から早く、なるべく簡単にと控室で忠告を受けましたので、簡単にお話をいたします。三つのこととお話します。

第一に指摘したいことは、現代の日本文化は世界で大変広く受容されていて、恐らく日本の有史以来、初めて日本発のさまざまな文化芸術の作品が、世界中で受け入れられていると言っていいと思うのです。そのようなことがどうしてできたかという、この背景には、戦後の日本社会が達成した一つの社会の形、それを私は長い間「中間社会」と呼んできたのですが、いわば社会の中間層の人たちが非常に肥大して、大体全社会の90%ぐらいをいわば社会中間層の人が占めている。それで上層のいわゆる富裕階級、また下層の人たちというのは、ほんの薄っぺらな存在であるという社会を、戦後の日本は、自由主義、民主主義体制の中で達成してきたわけです。

東西冷戦が解消して、90年代の初めに、当時のロシアのエリツィン大統領が日本にいらしたときに、日本社会を見て、みんなが同じ服装をして、同じようなものを食べて、同じように楽しんでいる。スーパーに行けば何でもある。超高級品はないけれども、日常的なクオリティの高い製品が並んでいて、それをみんなが買っているのを見て、これこそソビエトが達成したかった社会であると言って涙ぐまれたというのを新聞の報道で見ましたけれども、日本人は敗戦の体験の後、その惨禍を乗り越えて、また社会的な革命を得ずして、「みんな一緒」の「中間層社会」を作り上げたわけです。

ですから、日本には超金持ち階級はありませんし、また、本当のスラム街というものも今ではありません。こういう「中間層社会」、80年代初めに東大の経済学の先生が「1億総中流社会」と名付けられましたけれども、「中流」言葉は少し意味が違っていたと思いますが、「中間層」が非常に肥大した社会です。これは、世界でまず日本以外には見付けることができません。ソビエトの社会主義革命によって達成された社会であっても、そこにはさまざまな不平等があり、また、階層間の格差というものも非常に高かった。ノーメンクラトゥーラといわれる特権階級もありました。

今、中国も社会主義国家ですが、ご存じのように超金持ち階級があり、しかも大変な貧困層もあるという、深刻な格差社会でもあるわけです。日本は非常に珍しいことに、革命を得ずして中間層社会を作り上げたわけです。これは偉大な達成だとわれわれは誇っていいと思いますが、その社会が創り出した文化であるということです。もっとも、21世紀に入って、この日本にも格差が色々な面に出てきて、問題となっていますし、これは無視できない現実ですが、他の社会と比べればまだ相対的に格差は少ないと言ってよいかと思えます。対策は、しかし、きちんと立てなくてはなりません。20世紀後半の「中間社会」を壊してはならないのです。

日本の現代文化というものは、アニメにしても、漫画にしても、あるいはファッションにしても、あるいは料理文化、回転すしとか、ラーメンとか、あるいはカラオケといったものにしても、今、世界で受け入れられているあらゆるものが中間的な性格を持っているのです。ヨーロッパのフランスや、イタリアや、イギリスの高級ブランド製品のように、世界で日本のものとして売られている高級品はまずありません。基本的には一般大衆が愛好する文化芸術であり、製品です。現代日本文化の面白いところは、世界中のあらゆる階層の人たちが、この日本の現代文化をいわば観賞できる、また愛好することができるということです。ヨーロッパやアメリカの社会では、文化も大変階層化されている、あるいは階級化されている面があるということが指摘されています。これはいろいろな社会学者が言っていますし、私も自ら経験しています。ですから、音楽といっても上流階級が好む音楽と、それから庶民階級の階層が好む音楽とは違うとか、18世紀以降の音楽は聞かないという階層があるとか、そういうことが若干ステレオタイプ化されてはいても、まだ言われるところがありますけれども、日本の場合はそれぞれ首相から一般の中学生までが大体同じようなものを愛好して、大会社の重役であってもカラオケとなると平の社員と同じ普通の演歌を歌ったりするわけです。こういう社会は、日本を離れるとまず見当たりません。

現代日本の誇るべき美術家、アーティストの村上隆さんの作品は、2年ほど前のニューヨークのオークションで約16億円という最高値を付けました。日本の伝統文化も含めてあらゆる芸術作品にこうしたオークションで値段が付いた中で、最高の評価を受けた作品を作り出した人ですが、この人の作品は、いわば戦後の日本のアニメや漫画、キャラクター製品を中心に、それを芸術にまで高めたものです。その村上さんがどうしてそういうことができるようになったかという、彼自身の言葉で言うと「日本というのはスーパーフラットな社会だから」と。つまり、階級やあるいは貧富の差そのほかによって文化が左右されない、スーパーフラットな社会だから、こういうものができたということを書いていらっしゃるし、また、お話しになっておられます。

そういう中間的な文化、これが日本の現代文化なのです。これは非常に重要なことであって、多かれ少なかれ現代世界のさまざまな社会は、こういう中間層の文化というものを目指して発展していると言ってもいいかと思います。ヨーロッパ社会も、もう過日のような大階級社会ではありませんし、アメリカはまたすごい階級社会なのですが、そのアメリカでも中間層が非常に大きくなってきていて、いろいろな民族や人種の人たちが構成している社会が「中間階層に」するのは大きな希望でもあるでしょう。これは中国でもインドでも同じだと思います。

そういう人々に対して日本の文化は訴えるわけで、「鉄腕アトム」は何語をしゃべっても受け入れられると誰かが言っていました。まさに日本のアニメは、アラビア語でしゃべっても、あるいはスペイン語でしゃべっても、あるいは中国語でしゃべっても、それが世界の人々に受け入れられるわけです。どんな言語であってもアニメのキャラクターはそれにこたえることができる。しかし、例えば日本の映画俳優が、日本の女優さんが映画の中でアラビア語でしゃべると、これは何か違和感がある部分が出るかもしれない。けれどもアニメや漫画の場合には、それが世界的に普遍的に受け入れられるということで、そういうものを作り出したのが戦後日本の文化です。

しかも、指摘されておりますけれども、このアニメや漫画といったものは、12世紀の王朝時代に日本で作られた絵巻物とか、あるいは、江戸時代の浮世絵といったものがその源泉にあるというわけですから、伝統文化のDNAもちゃんと継続して現代文化というものを発展させた。それが現代日本文化です。

ですから、まず、この「中間社会」と「中間文化」というものが非常にユニークなものであって、その価値というものを守らなければいけない。19世紀の終わりから20世紀の初頭にパリで万博がありまして、そのときに初めて日本の浮世絵や絵画、あるいは工芸品などがヨーロッパ人の目に触れたわけですが、それがご承知のようにフランスの特に印象派の画家たちには大きな影響を与えて、芸術的な一つの旋風を巻き起こしました。ジャポニズムといわれて大きな評判になったのですが、これはあくまでも芸術愛好家、あるいはアーティストの間での話だったのです。

それが今の、21世紀初頭の日本文化の受容というのは、いわば世界の大衆に向けて発せられた文化的なメッセージであり、その点だけ幅広く、まさにスーパーフラットな中から生み出されたものとして受容されているということです。ただ、全世界の人々にとって非常に魅力的な文化を発信した日本社会も、現在は非常に大きな問題を抱えています。

その前に言っておきますが、例えば村上春樹氏の文学作品は、世界各国の言葉で翻訳されて、ものすごい

ファンがいます。例えば、僕が先年、ドイツの大学で講義をしてきたときに、若い学生がハードカバーの本を抱えているので、見たらハルキ・ムラカミのドイツ語訳なのです。それを見て、「あなたはこの本を読んでどう思うの？これは日本人の作家が書いたものだけれども。」と言ったら、ドイツの女子学生、若い学部学生が言うには、「ここには私たちの問題が書いてあるので、別に日本とか、日本人の作家が書いたということはほとんど関係ありません」という答えでした。

つまり、現在の世界の若者とか、あるいは中間層の人たちに訴える文学作品や文化というものは、まさにこういう中間的な社会から生み出されたものであるだけに、階級制や人種、民族、文化の境界を越えて愛好される。そういうものを現代の日本は創り出してきたということを、われわれはここできちんと把握しておく必要があると思います。

次に第二の問題は、こういう「中間層社会」が、どういう形で、どういうシステムで動かされてきたかというところ、これが今現在問題になっている問題でもあると思いますが、あくまでも「同類的」なのです。日本人の同類的な集団が持つ基盤の上で動かされてきたわけですし、これは役所にいけばよく分かります。例えば、文部科学省の隣に財務省がありますが、国家公務員として同じ日本人が働いているのにも全然別の世界を形成していて、本当は日本国全体のために協力していろいろなことをやらなくてはいけないのに、それが必ずしもそうはいかない。横浜市の場合はどうか知りませんが、いずれにしても横浜市の職員として入って、いろいろなところに配属されますと、その部、あるいは職員としての世界というのができてしまう、なかなかほかの部署や省庁の人を入れない傾向が見られます。同類的な人たちで作っている仕事場、あるいは組織は、非常に運営がしやすいのですけれども、それが現代の日本の社会のようにいわばグローバル化の波にさらされ、また、国際化の呼び声が高い時代になりますと、この同類的な原理というものに固執することによって、逆に閉鎖性が生まれて、まさに創造性というものが失われてくる。

「同類社会」の原理で、日本社会では職場にみんな同じに来ているものですから、1人が動かないとほかの人も動けなくなるということになって、特に上の人の方が動かないと動けないということになります。ですから、こういう「同類社会」の原理は、いろいろな形で日本の社会に影響を与えておりますし、まだまだ現在でも、企業であれ、官庁であれ、大学であれ、「同類性」の原理を抜け出せないでいると私は見ているわけです。

同類性というのは、別に外国人を入れればよいというわけではないのです。つまり、同じ日本人であっても、異種混合しながら組織を動かしていくという見方が全然でこないわけで、そういう「同類性」の原理がうまく作動していたのが1980年代ぐらいまでであって、90年代になると、その欠陥が出てきて、また21世紀になりますとグローバル化・情報化と少子高齢化という影響も別の方から出てきて、ますますがんにがらめになっているのではないかと思います。

ですから、何とかこの同類性の原理というものを、どこかで創造的に、前向きに変えていくような努力をしないと、いかに創造都市とか、創造社会とか、創造クラスターだとかといっても、それは無理だろうと私は思っているのです。

「中間社会」の「中間文化」が日本の文化の特徴である。もう一つは、しかしそれは同類性の原理に成り立つ社会システムから出てきたものであって、それが今うまくいかなくなると、むしろそのマイナスの部分が露呈してきている。そこで第3番目の問題として指摘したいことは、今や世界的に見て、21世紀社会というのは移動の社会です。移動というのはいろいろな形で言い換えることができますけれども、人、物、情報の移動が現代の社会、あるいは世界の最も重要な現象になりつつあるということです。

それは移民だとか、あるいは、労働力の移住といったこともありますし、また、農村から都市への移住とか、あるいは職場が変わるとか、さまざまなものが移動する。また、情報も、もちろんさまざまな情報機器によって移動するということがありますけれども、移動というものをどういうふうに消化するかということが、創造的な都市あるいは創造的な社会の一つの大きな問題だと思うのです。

ですから、この横浜市のような国際都市、開港記念をしております国際都市においては、まさに人の移動というものから情報の移動、それから物の移動というものをいかにうまく調整して、それを創造的な力に振り向けるかということが大きな課題になると思います。

つまり、「同類的」な原理に立つ社会において一番いけないのは、個人の創造性を封じるということであって、何か集団で会議をして、1人が卓見を述べても、みんなが同意しないとそれが葬り去られるし、また、なかなか個人がそういうことを言い出せない。自分で思い付いた非常にいい、ユニークな意見であっても、

ほかの人たちもそういうことを考えないと、それを主張することは非常に難しい。こういう雰囲気の中では、創造的な社会の発展というのは起こってこないだろうと。

しかも、昨年来の経済不況にありまして、日本で、いわば利益を上げている企業というのは、例えば任天堂のような文化産業、あるいは宮崎駿監督のアニメは全世界で非常に好評を博していますし、また、日本のさまざまな文化的グッズは、アニメや漫画に起因するものも含めて世界的に経済的な効果を上げているわけですが、これを見ますと、すべてそれを創っている人たち、アーティストは小集団で、いわば自発的な、個人的な創意に基づいて作品を創ってきた。それが日本国内だけではなく全世界的に受け入れられているわけです。つまり、あくまでも個人の創意や創造性というものを大事にしながら、いわばそれを活力にして作品を作ることが重要なわけですが、大企業や官僚システム、あるいは大学もそうだけれども、なかなかそういうものを育てることができなくなっております。

ですから、創造的なことは重要なわけですが、移動と創造性、常に移動することによって創造性が活発になるということもあるし、自分が今までずっと慣れてきた世界から別の世界に行くことによって、そこで非常に刺激を受けて新しいものを創り出すということがあるわけで、文学作品、芸術作品、あらゆる創造的なものというのは、そういう移動によって創られることが非常に多いわけです。現代社会の一つの大きな特徴である移動と創造性というものをいかに取り入れて、都市の発展の力とするかということが、大きく課されている問題だと思います。

ここで申し上げたいことは、その移動性というものをどういうふうにも評価するか。それからまた、何も移動性というのは、今は労働力が少子高齢化によって少なくなるから外国人の労働者を入れればよいという話ではないのです。つまり、国内的にもいろいろな形で異種混合の移動をうまく図って、それをあくまでも創造性という点において評価していくという移動です。そういう移動というものを作り出していかねばならない、きちんとそれを評価しなくてははいけない。それをできるかどうか大きな問題だと思います。

「中間社会」というのも、今や格差社会とかいろいろ言い換えられているのですが、まだ、アジアを見て、ヨーロッパを見て、あるいはアメリカを見ても、日本の「格差社会」というのは、こういうことを言えば語弊もあるかもしれませんが、それは程度の問題でもあります。まだ中国などと比べても格差とはいえないぐらいの格差です。

ただ、日本国内においては格差というものは存在するわけで、それは国内においては大きな問題ですが、アジアやほかの国と比べたら、まだまだ格差とはいえないぐらいの格差の差であるともいえるわけで、格差を解消してゆく手段を講じながら、われわれはまだまだ希望を持って「中間社会」を維持しながら、創造的な社会づくり、あるいは都市づくりというものを進めていかななくてはならないでしょう。

その際、何が手掛かりになるかということ、まさに日本が世界に生み出している文化芸術です。世界で受け入れられている文化芸術はみんな、いわばそういう少数集団、あるいは非常に独創的なものを大切にしている集団によって創り出されたものである。これを全体社会にモデルとして広げながら、役所の仕事も、あるいは企業の仕事も、大学などの仕事も行っていくということが重要かと思えます。

横浜市についていろいろな意見もあるかと思いますが、これからディスカッションがありますので、まず、この場においては現代日本文化をどう見るか。それから、移動と創造というものの重要性ということを改めて指摘させていただきまして、話を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

(加藤) 青木先生、ありがとうございました。個人的にどうも日本の社会は生きづらいと思っているのですが、それはスーパーフラット社会からどうしてもはみ出そうとする傾向があるので、生きづらいのだということがよく分かったという意味でありがたかったのですが、それはともあれ、今、日本文化が世界から着目されている、歴史的に見ても極めて、特にこの時代がすごく着目されている時代だということについては全く認識が同じで、そういう意味では、せっかく注目されているのに日本からうまく世界に向けて独自性を発揮し切れていない。その点が非常にもったいないなと。

特に今、横浜においてもトリエンナーレその他、幾つかの試み、今度も映像の大きなフェスティバルをやりますが、そうしたものを通して幾つかの事柄はスタートしていますが、まだまだ日本全体で見て、今、絶好のチャンスだと思うのですが、充分ではない。そういう点で国立メディアセンター問題なども、このまま終わってしまうとすごくもったいないなと思っております。大変示唆に富むお話をありがとうございました。

ました。

引き続き、今度は伊東豊雄先生にお願いしたいと思います。伊東先生は、もう言うまでもなく世界的な建築家でいらして、都市建築を通して、われわれの創造都市の考え方について、いろいろとご示唆をちょうだいできるものと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

「境界」のデザインが文化都市を創造する

伊東 豊雄(建築家、(株)伊東豊雄建築設計事務所 代表取締役)



伊東 豊雄
ITO toyo

よろしくお願いいたします。私は日々建築の設計に携わっておりますので、建築からどうやって創造的都市の可能性が生まれるのかというお話をしたいと思うのですが、現在の日本では、残念ながら建築を造ることは悪であるかのようによく言われます。一方で、大いに反論もあるのですが、他方で建築家の側にも相当問題があるのではないかと。建築を変えなければいけないと、最近、痛感しています。

東京のような都市を空から見ると乾いた瓦礫の山のようにスーパーフラットな都市空間が続いています。そして均質なグリッドを積層しただけの高層ビルが建ち並んでいます。

現代都市の最大の問題は、ひたすら均質化を高めてしまったということです。個性のある中間層が生き生きと暮らしていた時代には良かったのですが、このような都市で暮らすようになって、人間までも均質化し無表情になってきているのではないのでしょうか。

特に大規模な建築は、極度に人工的な環境をつくって周辺環境との関係を断ってしまっています。

性能という点ではものすごく質は高いのですが、その建築の中だけの性能に終わっている。10階で働いていようが、50階で働いていようが、南側で働いていようが、北側で働いていようが、ほとんど同じ環境なのです。

サステナビリティとかエコロジーが問題にされる社会において、このような建築を造り続けながら、サステナブルな環境を求めようとしているのは、根本的に矛盾があるように思います。

どこかある地域が再開発されて、大きな建物が建つ。高層化によって、周辺の土地をグリーンにする。これは現代の典型的な開発手法ですが、果たして環境は良くなっているのでしょうか。[01]閉じられたエリアの中での最適解だけが求められているのです。そして、一步外に出ると、周辺は開発エリアとは全く関係ありません。こういう開発があちこちで繰り返されているわけで、すべてが高層化され、グリーンが多い都市になればともかく、現実的には常にこの境界面は摩擦を生じ続けている。

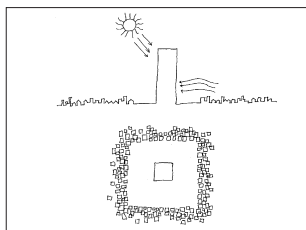
20世紀の近代主義は、機械のような建築を求めてきた。ですから、現実の中からある部分を切り取って、その中だけで最適解を求めてきた。でも、そのエリアの境界を明確にしない限り、最適解でも何でもないので。

三百数十年前の江戸の鳥瞰図を見ると、二つ面白いポイントがあります。一つは、江戸城を中心にしてスパイラルを描いているということです。これは、江戸という都市の造られ方が、成長あるいは変化を想定しながら、ダイナミックなスパイラルの幾何学を描いたという点です。そして、もう一つは寺社であった土地の、ちょうどその内側には武士が住んでいて、外側に農民が住む農地でした。そのちょうど境界面に寺社があって、そこがコミュニティの場所であり、そしてまた、文化の生み出された場所であったということがわかります。

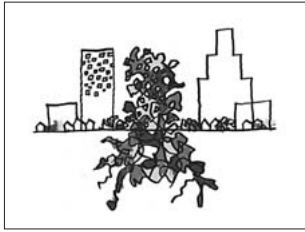
地方に行っても、人々が住んでいた集落とありのままの自然との間に、必ず農業の行われていた場所があります。とりわけ水田は、われわれの祖先が考案した大変美しい、社会的なシステムです。いかに水を満遍なくすべての水田に供給するかを考えて、棚田のような合理的で美しいランドスケープを作ったのです。そうやって常に人間の住む場所と自然との境界に、最も文化的なエリアが作られてきた。これは大変意義のあることで、私たちは今もう一度、境界という場所を見直して見るべきではないのでしょうか。

また、ちょうど100年ぐらい前の、横浜に電車が初めて通ったころの鳥瞰図を見ても、山間部と居住地との間にフラクタルな境界を作っていて、港という中心へ向って、一つのシンボル性を持った都市空間が作られてきたことがわかります。

そういう全体の志向が、今の東京や横浜で意識されているのでしょうか。東京よりは横浜の方が、はるかに港湾都市というイメージは強いと思いますが、やはりこのようなシンボルとか中心という問題を思い出



●—01



●—— 02 出典：『20XXの建築原理へ』
NAX出版 2009年



●—— 03 平田晃久「Tree-ness City」
出典：『20XXの建築原理へ』
INAX出版 2009年



●—— 04 藤本壮介「建築のような都市、
都市のような山、山のような建築」
出典：『20XXの建築原理へ』 INAX出版
2009年



●—— 05



●—— 06 互助营造 提供

してみる必要があるでしょう。

そして、ごく最近、これからの日本を背負っていく若い建築家たちと、高層ビルを提案しながら、もっと周辺環境との関係を作り出していくような方法はないのだろうかという議論をしました。

そして、これは私が書いたイメージですが、[02]周辺のフラクタルな住宅、あるいは中小ビルがそのまま高層化していくようなイメージは描けないだろうかという議論をしました。

そして、そのうちの1人、平田晃久さんという30代半ばの建築家の描いたプロジェクトは図のようなものでした。私の事務所のすぐ近く、最近解体された青山の東京都の病院跡地に彼の夢を描いたものです。

[03]

これを見ていただくと、明らかに周辺のビルとは違う。しかし、今でもこの周辺にたくさん残っている独立住宅や小規模のビルが、そのまま建ち上がったような連続性を持っています。そして、緑も地面の上にあるだけではなく、地上数十メートルの上空にまで立ち上がっています。

もう1人の建築家、藤本壮介さんも、ご覧のように大きな1本の木のようなプロジェクトを作りました。

[04]地下にも、これが伸びていっています。

これはあくまでも架空のプロジェクトですから、こんなものできるわけないよと思われるかもしれませんが、彼らが高層ビルをデザインしたら、今の高層ビルとはかなり違ったものになることは確かです。

ちょっと私事で恐縮ですが、今日お話ししているコンセプトを、より具体的にご理解いただくために、簡単に二つのプロジェクトを紹介させていただきます。一つは、8年前にオープンした「せんだいメディアテーク」というプロジェクトです。

このプロジェクトは、コンペティション直後には相当な反対を受けました。そして、そのときに一番頑張って推進してくださった方が、担当課長だった女性なのですが、その後、メディアテークの初代の館長になり、そしてこの7月に市長にられました。そして、仙台は人口100万の都市ですが、年間100万の方がここを利用してくださっています。図書館が中心になってアートギャラリー、それからビデオやフィルムのシアター、その他、売店や、カフェなどが組み合わされた施設です。

この建物には、幾つかの特徴があります。ご覧のようにチューブと呼んでいる太い幹のような構造体が13本ありその内側は空洞になっていて、上部から垂直方向に外気や自然光が落ちてくるのです。そうやって、内部と外部との関係を親密にしようとしています。

それから、また全体に亘って各フロアとも壁が非常に少ない。部屋と部屋を隔てている壁を極力取り去りました。そのことによって、子どもだけでこの施設にやっても、子どもの部屋に押し込められるのではなく、大人の間に入ってビデオを見たり、本を読んだりすることができます。[05]

それからまた、垂直方向の壁だけではなく水平方向の壁、つまり床にもたくさん穴が開いていますから、上下の視覚的關係も作られています。従って、図書館とアートギャラリーとは切り離されてはいませんし、それからまた、お年寄りのコンピュータ教室の隣で学生がワークショップをやっています。そうやってオープンして1年たったときに、館の人から、お年寄りのファッションが変わったと聞きました。境界を取り除くという、例としてご紹介しました。

もう一つの例は、7月に台湾の高雄市でオープンしたワールドゲームというスポーツイベントのために造られた、4万人を収容するスタジアムです。[06]

このスタジアムは公園の中に造られたのですが、当初から、公園の中にスタジアムを造るのではなく、スタジアム自体が公園であるようなスタジアムを造りたいと考えました。

従って、メインゲートの方向は外に向かって開かれています。そして、多くの人々がやってくる地下鉄の駅の方向にスタジアムの屋根が長く伸びています。その結果、公園とスタジアムが一体化されたということだけではなく、このスタジアムを使っているときに、南西からの涼風が観客席に入ってきて通り抜けていきます。そして、スタジアム自体は少し掘り込まれているので、その風は競技する人々には影響がない。それから、周辺にはピオトープを含む公園が整備され、この上を通る風はより冷却されることになるのです。それから、屋根は13,000㎡にわたってソーラーパネルが貼られています。太陽のエネルギーを利用するだけではなく、大変暑い地域ですから、観客席の遮光も兼ねているのです。

このように、環境と建築とを一体化したスタジアムは今まで多分なかったと思います。数万人の人が入っているときだけは盛り上がるけれども、普段は何でもない閉じた箱になってしまうのではないスタジアムを造りたいと思ったのです。

エコロジーとかサステイナブルなシティ、あるいはサステイナブルな建築というならば、建築と環境との連続性、境界の連続性、そしてサイトスペシフィックと言いますか、その場所でしか成り立たないような建築、それが場所の持っている力を引き出すことになるだろうと思うのです。

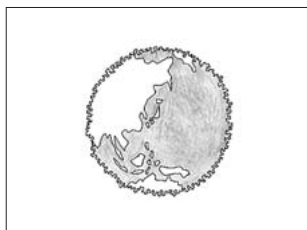
そして、多様な、均質とは全く逆の変化に富んだ場所を作り出すような建築を造ることが、創造的な都市につながっていくのではないかと思います。

横浜は大変大きな財産を持っています。開港以来の古い建築もたくさんありますし、とても楽しいまちなみが今でも残っています。

しかし、今朝、私はその開港時代の写真を見てまいりましたが、建築的に見るとかつての景観の方が独自性があり、魅力的だったようにも見受けられます。それはなぜかという、開港してヨーロッパやアメリカのものが入ってきたときに、それが日本とどう同化し得るのか、その境界の問題を、当時の横浜の人々は考えたはずなのです。今はやはり建築が均質化しています。横浜にとってもう一度、新しさとは何なのかというテーマで考えてみると大変面白い。それこそ日本では他にない創造的な都市になると思います。

[07]最後に、これは丸い地球をフラクタルな地球にしようというイメージです。今は建築を造れば造るほどピカピカつるつるした地球になっていくわけですが、もっと、逆に造れば造るほど地表面が増えたという地球にはならないだろうかと言いたいのです。

どうもありがとうございました。



●—07

(加藤)ありがとうございました。今年、横浜は開港150周年を迎えて、そのお祝いをいろいろやってきたのですが、今、最後に伊東先生からちょっとつるつるしすぎじゃないかというか、150年前はもうちょっとほかの文化との衝突、融合の中から横浜らしいものを発明できた。もう一回、そういうことに取り組むべきだというお話だったと思います。ありがとうございました。

第2部

パネルディスカッション

(加藤)これまでのところ4人の方にプレゼンテーションしていただいたのですが、それぞれに日本を中心にアジア、太平洋を含めた文化のあり方、現在どうなっているか、これからどういう可能性があるかということについて、横浜の事例を含めてお話をいただきました。

これをお聞きいただいて、ピーター・ホール教授にコメントをまずちょうだいしたいと思います。よろしく願いたします。

(ホール)どうもありがとうございます。皆さんの発表を大変興味深く拝聴いたしました。パネリストの発表それぞれにコメントするのではなく、これまで提起された問題点を幾つか選んでお話ししたいと思います。異なる問題点が実は深く関連していることもあるように思いました。

私にとって最も興味深かったのは、日本社会の性質をどう描写し、分析するかということです。また、社会の性質が今後どのように変わるのか、社会的な関係がどう変わるのか。その変化がこれからの創造性にどう影響するのか。この点についての皆さんの発言を興味深く伺っていました。

日本というのはある意味で均質な、そして、中間的な社会である。そして、今まではそれによって社会の統一感が成立していたが、もしかしたら画一性の弊害や、過剰なまでの年功序列を尊重するという犠牲を払ってのことだったのかもしれない。皆さんのお話から私が理解したのは以上のようなことですが、誤解がないことを願っています。

日本は民族的にかなり均質的であっただけでなく、文化的にも均質的で、そのおかげで社会のまとまりを達成しやすかった。文化の均質性というのは、例えば、何世紀も前からの伝統文化を昔も今もほとんど全員日本人が受け入れ、共有している。今日なお、日本人すべてが受け入れ、共有する現代文化がある。そして、新しい通信メディアによって、日本の文化が全世界に輸出されるようになり、しかも大変うまくいった。特にアニメや漫画は大成功を収めている。このような発言もあったと思います。

これらのご指摘はそれ自体非常に興味深いものですが、より広い国際的な文脈の中で考えると、さらに興

味深い点が出てきます。というのは、日本以外にも似たような性質を持つ社会があったからです。例えば戦後のヨーロッパ、特に北欧の社会です。スウェーデン、フィンランド、デンマーク、またノルウェーなどの社会では、ある程度の均質性がありました。所得格差が非常に小さい。人々のライフスタイル、生活のパターンが非常に似通っている。そして、社会的な統一感もありました。けれども、ここでもやはり画一性という問題を指摘することができます。

これとは正反対の例もあります。それは西洋世界のきわめて個人主義的な社会のことで、アメリカがその典型です。そして、正反対例の常として、両方の社会のあり方にはそれぞれよいところも悪いところもありました。

西洋の社会については、もう一つ重要なことを言う必要があります。西洋では、1960年代に社会は大きく動揺し、68年にその混乱が一応終結するわけですが、その後、社会の成り立ちや組織、そして文化的な価値観が大きく変わってしまいました。これはアメリカで始まって、すぐにヨーロッパに伝わり、それ以外の地域にも伝播していきました。それまでの価値観が根底から覆され、あらゆるところで社会的統一感やまとまりが破たんしたのです。

アメリカにおいても、ウィリアム・ホワイ特という社会学者は1950年代末のアメリカ社会をまとまりや統一感という表現を使って描きました。余談ながら、彼の著作『組織の中の人間 オーガニゼーション・マン』は社会学の古典となりましたが、彼自身はその後都市計画・都市論の専門家となっています。いずれにせよ、西洋においては、彼が描いた調和と統一性のある社会はほぼ消滅してしまったと言ってよいと思います。こうした社会像とその変質は、日本の大企業にも見出せるのかもしれませんが、日本の大企業はどこよりも長く統一性を保持してきたのではないのでしょうか。

いずれにしても、私が申し上げたいのは、西洋における価値観の変化は長期にわたって社会の変質をもたらしたということです。具体的に言えば、アメリカの個人主義的な組織のあり方——あるいは組織の欠落、無秩序——が次第に西洋の大半の社会を席卷していきました。80年代に入ると、イギリスでさえ同じような変化に見舞われました。より活力に富んだ社会になったのかもしれませんが、社会のまとまり、統一感のようなものは失われました。このような社会の変質とその功罪についての議論は今日まで続いています。

私の印象では、日本の場合、変化はゆっくりと進むのではないかと考えています。日本の社会で初めて長期にわたる失業率の高さが問題となり、有名な終身雇用制度が揺らぎ、深刻な社会的な問題も発生してきている。しかし、今こそ変革のチャンスかもしれません。つまり、アメリカ的な社会に近づくと言えるのかもしれませんが、より活力に満ちた、新しい社会や組織を作り出す好機にもなり得るはずで、それは非常に有意義なことであると思います。

もう一つ重要なポイントとして、移民の問題があります。ヨーロッパでも日本と同じように高齢化社会の問題を抱えています。ただし、イギリスは違います。相当数の移民を受け入れており、彼らは若く、文化的な背景から出生率が高いので、イギリスの人口は増加しており、人口減少の問題はありません。しかし、ドイツ、イタリアをはじめ、その他多くのヨーロッパの国々では、少子化・高齢化社会は非常に大きな問題で、人口減も見込まれています。この問題がそれぞれの経済や社会的におよぼす影響はきわめて深刻なものです。先頃、ドイツでは政府の肝いりで都市の実態について大規模な調査が実施されましたが、その調査結果でもこうした深刻な問題が明確に指摘されています。

こうした問題への対応として、ヨーロッパの多くの国で大量の移民の受け入れが再び検討され始めています。ヨーロッパではすでに移民を受け入れている国が多く、その結果、移民が多く流入する都市部では民族的にも、文化的にも、そして社会的にも混合型の社会へと変化しつつありますが、今後もその変化が続いていくことは避けられません。

ただし、この問題について前例がないわけではありません。例えば、アメリカ社会そしてアメリカの都市は、かなり長い間、同じような問題を抱えており、すでに1920年代のシカゴ派社会学の研究によって詳細に分析されています。当時、シカゴについて論じられたことが、今ではロンドン、ベルリン、ミラノ、そしてその他のヨーロッパの多くの都市にも当てはまるようになっていくのです。

その一方で、都市は移民を受け入れることで潜在的な力を獲得すると言ってもよいと思います。もちろん、異なる文化の伝統が混在すれば、最初はどううまくいかず、異文化間の断絶だけが感知されるでしょう。混在や融合が始まると、なお一層異文化間の緊張が高まるかもしれない。けれども、今後50年、移民や異文化

との共存はヨーロッパの都市にとって新たな創造性の源になるとも思います。だからこそ、私は潜在的な力と申し上げているのです。ですから、皆さんが初めて自分のまちに移民を受け入れることになった場合、それをチャンスととらえて、今申し上げた可能性を試すこともできるというわけです。

横浜は港のある都市ですから、おそらく日本の多くの都市よりは、異質性や多様性に馴染んでいるのではないかと思います。また、東京を取り巻く首都圏の中に横浜市も入るわけですが、横浜の社会が持つ多様性への許容度ゆえ、首都圏で最も大量の移民が入る都市になることも考えられます。そして、そのような事態は、まさに創造性という点で横浜に新たな可能性をもたらすと考えられます。しかし、これはあくまでも私の個人的な憶測です。この点については、ほかのパネリストの皆さんのご意見をうかがいたいと思います。また、会場の方からもご意見いただければと思います。

(加藤) ありがとうございます。青木先生から、日本はスーパーフラットな均質的な社会だというご指摘があり、それを受けて、今、ピーター・ホール教授からも、そうした文化的な均質性によるまとまりというものもあったかもしれないけれども、そうでない新しい創造性が生まれる可能性があるというコメントをいただきました。

特に、伊東先生から、建築の側面から見ても、均質性よりは多様性の方が重要なのだというご発言があり、この点は、カセム先生も多様性、特にアジア太平洋地域を視野に入れた価値観の多様性や地球的課題の解決、あるいは平和の繁栄といったことを考えると、むしろこの多様性ということに着目すべきだというご提案だったかと思います。

その辺りについて、カセム先生からさらに付言していただけますでしょうか。

(カセム) ホール先生がおっしゃっている、移民社会の話からさせていただきますと、やはり多様性の一つの新しい原動力になるのは移民社会だと思います。ただ、1920年代、30年代のアメリカとの大きな違いは、当時、アメリカは同時に高齢化していなかったということです。成長していました。だからその成長を享受するために、金持ちになる社会層が、やりたくない仕事をやる人を呼んでいたわけです。

しかし、今後、日本が直面する移民社会は、完全に正反対のものです。付加価値の高いものを生み出せる人を呼ばなければいけない時代になります。逆に3Kの仕事はできるだけロボットなどにやってもらった方がよいでしょう。だから、移民は新しい産業創出につながり、人を搾取しないで多様性を受け入れる。これは世界で前例がありません。まずこの点を強調しておきたいと思います。

第2点として、先生がおっしゃった「集団の価値観vs個人的価値観」についてですが、従来、「集団」というと地理的なまとまりを中心に考えていました。コミュニティというときも、物理的、地理的なコミュニティのことです。それは当然にならない、大事な要素だとは思のですが、そのコミュニティが、空間を超えて、全然離れているコミュニティと同一な価値観で協働事業等々を通じて、いろいろなことを共有したり、生み出したりする可能性を感じます。

例えば、愛知県は日本の自動車産業の中心ですが、そのサプライチェーン・ネットワークはほとんど完結的に中部地域の中にあります。九州は自動車製造地としては、多分、今第3位ぐらいですが、いずれ2位になって、1位になるかもしれない。そして、九州地域の自動車産業のサプライチェーン・ネットワークは、周辺諸国、中国、台湾、韓国が含まれており、これも前例がないことです。

ですから、これからの創造的なイノベーションを考えると、どうしても国境を越えたものになる。では、何が統合やまとまりの原動力になるかということ、例えば平和や環境問題などの高い志と、みんなが協働できる創造性豊かなプロジェクトが皆さんをまとめてくれるものになるのではないかと考えています。そういうものを生み出し続けられれば、クリエイティブシティの未来が保証できるのではないかと考えています。

(加藤) 先ほどのプレゼンテーションの中で、伊東先生が、昔の写真を見ると横浜は昔の方が良さそうというお話をしておられまして、今はちょっとそれに比べると元気がないというか、つつるすすぎているというか、ちょっと表現はともあれ、そういうご指摘があったと思いますが、野田副市長いかがでしょうか。そんなことはないのだ、これから今の横浜も可能性があるのだということをお話いただけますか。

(野田) 建築という観点からは、昔に比べれば多分つつるすはしてしまったのかなと……これは日本のみ

ならず、本当に今、世界どこへ行っても都市は非常に均一化、画一化しているのではないかと思います。中国でさえ、北京に行っても、まさにスターバックスがあり、これはデザインではありませんけれども、本当に高層ビルがあって、そして、その中にはスターバックスがあって、ミシュランの二つ星のレストランがあって、イタリアのデザイナーズブランドがあってということで、本当にここが北京であるということを忘れてしまうぐらいに均一化しているのではないかと考えています。

私は、やはりこれからの横浜を考えたときに、先ほども何度も申し上げましたが、横浜の個性にこだわりたい。横浜の歴史、横浜の本当に持っている独自性、地域の資源というものに、もう徹底的にこだわって、それをベースに創造していく、新たな価値を生み出していく。これが本当に必要で、もしかしら伊東先生は手遅れとおっしゃるかもしれませんが、150周年を機に、こうしたものをぜひ少しでも作ってきたいという思いがあります。

そのために市民とともに、横浜の本当の歴史は何だったのかということと共有し、それをベースに、どういうふうな私たちの道を、進路をたどるべきなのかということを考えるべく、今、取組をしているところです。

(加藤)ありがとうございます。伊東先生に先ほど紹介していただいた「せんだいメディアテーク」は、実際に私も何度か使わせていただいたことがありまして、実際にあそこで事業をやらせていただいたこともあります。本当に空間として素晴らしいと思いますが、時々、いいときと悪いときがある。その意味は、空間は本当に素晴らしいのですが、中の運営をする担当者によって、すごく使いやすかったり、あるいは使いにくかったりするのです。

何が言いたいのかというと、ハードとソフトの関係といいますが、ハードはすごく外に開かれたものを造ったとしても、その中を運営する人の問題で、必ずしもそのハードが活きない。あるいは、逆にハードが古くてもソフトで生きる場合もあるのだと思うのですが、そういうことから言うと、冒頭で建築家の存在についてというお話をされておられて、建築家からぜひ、横浜は私などから見ると、やや行き過ぎかなと思っているのは、もうあまり新しいハードは造らないのだと。それはそれで大きな流れとしては悪くないと思うのですが、とはいえ、例えば劇場などを見ると、まだまだ不足しているのだから欲しいなと思うところもあるんですね。そういった面からいって、建築家として、そのハードとソフトの関係を含めて、都市のもうちょっと広いスタンスの取り方について、さらにご意見をちょうだいできますでしょうか。

(伊東)まず、誤解のないように言っておきたいのですが、現代の横浜のまちが元気がないという訳ではありません。すごく元気だし、東京より個性がある都市だと思っています。

ただ、これは私自身も含めて責任があるのですが、現代の建築家が、近代主義の原理に従って相変わらず建築を造り続けている。その結果、現代建築は個性がすごくなくなってしまった。実際にまちづくりをやっておられる方々は、活動としては以前よりもはるかに元気な活動をされていると思いますし、先ほど加藤さんから伺いましたけれども、元町の商店街なども非常にオリジナリティの高い、地域に密着した活動をしておられる。その頑張っておられることはよく分かるのです。

ただ、横浜にはたくさんいい大学があって、そこには建築学科もあって、子どものワークショップもやっておられるし、それから、また新しい建築を考えているところもある。例えば、先ほど副市長から黄金町の再開発の紹介がありましたが、あれなどは本当に建築家が苦労して、赤線地帯のような場所をアーティストたちが活動できる場所に変えたという例は、本当に僕も素晴らしいと思っています。

ただ、皆さんの中にも新しい建築というと、どうも何の装飾もない抽象的な箱で、味も素っ気もないというイメージだけがあるのではないかと思うのですが、今や新しい建築というのはそうではないと思うのです。分かりやすい例を一つお話ししたいと思うのですが、私の母親は明治の人でした。そして、彼女が和服を着ると、上から下まで一瞬にして見事に調和するのです。ところが、彼女が洋服を着た途端にちんどん屋になる。この事実は、いまだに建築の世界では解決できていない、あるいは都市においても解決できていない問題ではないでしょうか。

ですから、古いものか新しいものか、和風か洋風かといった境界線を引くのではなくて、一番新しい建築は、もう一度、西洋的なものと日本的なものがどう混ざり合うのか。幸い、横浜市にはたくさんの財産があるので、その問題を徹底的に考えてみると、すごく面白い都市になるし、そのことが建築にとっても最も創造的なことであるという意味のことを申し上げたかったのです。

(加藤)建築家の観点からご覧になってのハードとソフトの関係というか……。

(伊東)確かに「せんだいメディアテーク」は大胆な建築だとは思いますが。私は多くのスタッフの人たちと話しましたが、通常の公共施設よりは、恐らくスタッフの人は大変だろうと思います。

なぜならば、スタッフの人の滞在する部分と一般の人が利用する部分との間に、確固たる境界を引いていないからです。スタッフの人が利用客のそばにいてサービスをするのは、僕は当然だろうと思っています。ですから、そのスタッフによってサービスの度合いが悪いということはあるだろうと思いますが、多くのスタッフの人は、かなりプライドを持って働いてくれているように思います。

ですから、何かを変えていくためにはやはり、それは政治家の言葉ではないですけども、痛みはある程度伴うのではないかという気はしています。

(加藤)ありがとうございました。特に前半で、横浜はまだまだいろいろ資源があるのだから、それをうまく活用していくことを一番考えやすいまちではないかという、勇気付けるお話をちょうだいできたと思います。そうした観点から言うと、横浜に限りませんが、横浜が、例えば日本の文化の特質をもっと活かして創造性を高めるには、一体どうしたらいいかということについて、青木先生、さらにお話をいただけますでしょうか。

(青木)ちょっと話が外れるかもしれませんが、私は10年以上前に横浜市で都市についての講演をさせていただいたときに、「歩ける都市」の重要性ということを申し上げました。日本の都市は、もう横浜も目覚ましい発展がなされているわけで、10年前でもランドマークとかいろいろのものができて、素晴らしい、大躍進の横浜でした。ただ、横浜駅からみなとみらい辺りにぶらぶら散歩して歩こうと思っても、歩けるように都市が作られていないので、それが簡単に楽しくできないのです。

外国の例を引くのはあまり好きではないのですが、例えばパリなどに行きますと、朝から晩までぶらぶら歩けば大体全市を歩いてしまうことが、苦にならずにできるように作られています。西欧の都市は大体歩けるように作られているのですが、横浜も東京も、京都などでも、歩こうとすると大変なのです。

ですから、やはり人が都市をどう使いこなすかという観点から、例えば駅から自分のうちぐらいまで半分ぐらい歩くとか、素晴らしいビルや、素晴らしい建物がいっぱいあるのはいいのですが、それをどういうふうに使ってこなすかという点で、「歩ける」という観点をぜひ導入していただきたいと思います。

アジア都市は、どこへ行っても歩けないのです。バンコクも、もちろん北京も、北京などは歩くのが大変です。上海も、イスタンブールも、僕は大体アジアの主要都市でかなり長く滞在していますが、シンガポールでもそうなのです。あんなに小さいところなので、歩こうともう必死になって努力しても、なかなか歩けないです。暑いだけではなくて、そういうふうになまが作られていないのです。

歩いていくと急に大きな段差があったり、それから、東京などもそうですけれども、六本木など盛り場で、ミッドタウンもあるし、六本木ヒルズもあるので、その間を結ぶ道路は高速の下の非常に汚い、整備されてない道です。歩けるように作ってあればもっと遊歩が楽しめるのに、それができない仕組みになっている。

これは、やはりこれまででは建設、建設で、ハードウェアの整備ばかりに開発が傾いていて、人間が都市をどう使いこなすかという観点での都市建設というものがほとんどなかった。それについて言えば、都市の景観というものも、非常に日本はおろそかにしてきた。江戸時代は違ったようですが、近代日本のことですから、一体どういう都市を作ったらいいかというマスタープランがどこにもないのです。

いわゆる今、東京駅の前にある中央郵便局は、近代的な建物として、文化財としても高い評価を受け、それをどう残すかという問題で最近大変もめましたけれども、もっとほかにもいいものがあったけど既に壊されてしまった例もいくつかあると思います。新しい高層ビルにしてしまえば何でもいいのかということになっただろうということであつたと思うのですが、やはり「歩く」という観点を導入しますと、そこからは高層ビルやいわゆるハイテクビルならいいという見方とは違ったものが見えてくるのです。文化的な創造都市というのは、一つ歩けるということが大きなポイントになると思います。それによって、また別の形の創造力が刺激されるのではないかと思います。

ついでに言いますと、先ほど都市の「中間層」と言いましたが、日本は1950年代に、農村から都市へ人口が流入して、世界でもまれな都市中心型国家になりました。人口の大体85%以上が、今、都市に住んでいるのです。そして、農村はほとんど壊滅しました。こういう国家、あるいは国や社会というのは、ほかにまずありません。

シンガポールなどは全部が都市国家ですから違いますけれども、やはり農村あるいは田園地帯とそれから都市が、ある程度バランスが取れて存在しているのが、アメリカでもヨーロッパでも見られるわけです。日本だけはもう全部都市なのです。それは都市の「中間層」が非常にうまく発展したことも理由なのですが、同時に、都市の「中間層」が発達したからみんな平均的な社会になった。われわれはどこへ行くのにも全く気取らずして行けるし、服装も自由に行ける。

60年ぐらい前には、あの有名なホンダの社長が、新しいファッションだということでネクタイをしなくて帝国ホテルに入ろうとしたら、ボーイさんに止められて「ネクタイをしてこい」と言われたというのですけれども、今はもうジーンズでも、もちろんTシャツでも、最高級ホテルに平気で入れる。これがいいことだとは、私は必ずしも思いません。思わないけれども、そういうフラットな社会になったことは事実なので、これをどうしても21世紀を通して、このフラットな社会、中間社会に磨きをかけて、そこに創造性とか、独創性が生まれることを心掛けていかなくてははいけないと私は思うのです。

それから、もう一つ、横浜は東京がそばにありますから、東京との差異化をどこで図るかという、やはりビルの数とかそういうものではなくて、文化芸術だと思います。それに横浜は学術文化の顔がほとんど見えないのです。横浜にはもちろん国大、市大、そのほか有名私立大学があるわけですが、学術文化が特徴としてなぜか横浜というのは全然見えてこない。

横浜で偉いと思ったのは、例えば東京芸術大学の、北野武氏が中心の映像学科というのを横浜に持ってきたことです。これはすごいと思うのですが、ではどうしてそれを横浜の大学によって作らないのかというの、よくわからないところでもあります。自前で作ればいいのかと思うのですが。

そういう意味で、もうこれ以上は言いませんけれども、もっと学術文化というものが、この横浜都市創成の中に位置付けられたらと願う次第です。私は以前から「東アジア大学院大学」構想というのを持っていて、日中韓でやろうと、勝手に1人で言っていて、ソウルでも言ったし、また北京でももちろん東京でも言ってきたのですが、日本ではあまりサポートしてくれないですけれども、ソウルや北京の人たちの中には結構サポーターがいるのです。

今、民主党も東アジア共同体構想を主張していますが、将来、「東アジア連合」とか「共同体」ができたときに、それを動かす優秀な人材を日中韓で養成する。それから、もちろん文化面でもいろいろな形で共同作業ができる。しかも、東アジアは世界の成長圏として、いろいろな面で東アジア抜きに、日中韓抜きに世界は動かないと言ってもよいので、この地域(またアジア10か国を入れてのことですが)に関する知識・情報について、ビジネスから、産業から、科学、地域の特徴、文化まで、何でもそこで学べるような大学院大学構想を持っているのですが、そういうものをここで作ってほしい。日本だけで作るわけではなくて、日本と東アジアの諸国が共同して作るようなことをしていただきたいと思います。

それと、何としても「歩ける都市」にしたい。そして、今や都市を歩く面で一番危険なのは自転車です。自転車ブームで、自転車ももう歩道も車道もいつも走り回っているので、これで事故が起こったら大変なことだと思います。実際起こっていますけれども、この自転車も、自転車に乗るということは非常に重要なことです。これが自由に行けるような自転車道をちゃんと造る。これはまだ東京ではほとんどできていません。ドイツなどは、もう完全に自転車道がありますから、自転車道を歩いていたら、車道を歩いているのと同じように怒られた経験がありますが、そういうものもいち早く横浜市には造ってほしい。

それから、もう一つは創造的活性化の場として、市民のための広場というものを作ってほしいのです。これは、日本都市は広場を中心に発展したヨーロッパの都市と違って、広場というものがないと言ってよいのですが、都市設置の新しい段階においては、高層ビルばかり造るのではなく、やはり人々が対面的なコミュニケーションを自由にできるような広場が、息抜きの場としてもほしい。休憩だけではなくて、一つそこで人々が自由に交わるような文化的な、公共的な場所としての広場というものも、どこかで作っていくべきだと思います。

最後に、アジア都市は今ものすごい力を付けてきて、例えば今アジアで最大のオペラハウスはどこにあるかといったら、北京にあるわけです。北京が国家大劇院を2007年に造って、2400の座席を持つオペラハ

ウスと、1800の座席を持つコンサートホールと、それから800座席の演劇劇場と、500座席の実験劇場を有しています。天安門広場の隣の巨大な池の中に、ドーム状のガラスの屋根がのぞいている形で、全部地下にうずまった、画期的な劇場空間ができました。そこでサントペテルブルクのマリンスキー劇場が来て、ゲルキツエフ指揮のオペラの上演を行ったりしているのです。

そういう劇場やコンサートホール、オペラハウスの音楽文化の拠点が、シンガポールにも2000年にエスプラネードができましたし、北京とかそういうところに移っていく可能性があります。今やアジアの都市というのは、経済成長だけではなくて、文化芸術による都市創造によって、お互いに競争する時代に入ってきたということです。

これは私は大変望ましいと思っていて、ヨーロッパへ行きますと、ロンドン、パリ、あるいはベルリン、ミラノというところは、飛行機だと大体1時間、2時間ぐらいの距離で行けるわけです。しかも、それでそれぞれ違った文化があるわけで、ロンドンのコベントガーデンもあれば、ミラノのスカラ座もあれば、それぞれ違った個性を持った文化芸術が存在するわけですから、人々は互いに各地の都市文化を楽しめるけれども、アジアではどうして楽しめないかと長い間思ってきました。例えば東京、横浜とソウル、北京、上海はみんな近い、2・3時間でいけるところばかりなのですけれども、それができないのは残念だと思っていたのです。これまではいろいろな歴史的、政治的事情でできなかったけれども、21世紀になってようやく文化を楽しめるアジア都市の時代が来た。そういう点でアジアの都市の文化競争が始まったと前から言っているのですが、その中で横浜は、ひとつ日本を代表する国際文化都市として、アジアとの文化芸術、創造都市のネットワークを作って、積極的に連携していただきたいと希望します。

(加藤) ありがとうございます。今ご指摘いただいた点で、二つだけ私の方から補足をさせていただきたいと思います。

一つは歩ける都市、これはまだまだ横浜は不十分かもしれません。しかし、日本大通りや、あるいは汽車道の整備など、歩ける都市づくりということはこれまでも相当丁寧に行っているところなんです。広場については、日本大通りのオープンカフェなどを含めて、そうした視点というものは今も持っているんで、ぜひ柔らかく、長い目でご覧いただきたいというのが一つです。

それからもう一つは、大学の姿があまり見えないではないかというご指摘についてです。これもわれわれにとっては大きな課題で、そうした問題意識をわれわれ自身も持っておりますが、その点については、既にいろいろな大学間のネットワークが少しずつ始まっております。今日この会場に、前横浜市の参与で、東京大学の北沢先生もおいでになっておられますけれども、北沢先生などを含めて、新しいネットワークづくりも近年始まっているところなので、これもあと数年見ていただくと、横浜の学術都市としての側面も見えるようになってくるのではないかと思います。その点は温かく、ゆっくり……。

実はもう時間が全部過ぎてしまって、最後にまとめもしなくてはならないのですが、その前に、ピーター・ホール教授と野田副市長にも、それぞれコメントをちょうだいしたいと思います。カセム先生から、世界ネットワークの形成というご提案がございました。今日は国際会議のスタートですから、これからどういう世界のネットワーク形成をしていったらいいのかということを含めて、最後にピーター・ホール教授からコメントをちょうだいできますでしょうか。よろしくお願いいたします。

(ホール) はい、喜んで発言させていただきます。ただ、ご質問とは少し違うところから話を始めさせていただきます。先ほどは都市計画について、特に言及しませんでした。この問題については大変重要なポイントが2つあるかと思えます。まず第1に、都市で何が問題となり、何が起きているのか、という世界的に共通する問題。第2点として、アジア太平洋地域、特に日本の都市に特有な点について触れたいと思います。

まず、世界の都市全般について申し上げます。世界中で、特にヨーロッパにおいて、持続性、サステナビリティという課題を解決しながら、どうやって都市を再構築するかということが、きわめて大きな課題となっています。例えば自動車の通行量を減らして、歩行者や自転車の通行量を増やす。イギリスでは、この課題は取り組まざるを得ない、そして絶対に解決しなくてはならない課題になっています。

自転車の問題については、ヨーロッパの国、例えばオランダやデンマークなどが先導的な役割を果たしています。最近、私はオランダ訪問の機会を得て、輸送システムを統合した先進的な事例を視察してきまし

た。オランダでは、専用の自転車道を使って、全国どこでも自転車で移動することができます。道路もはっきりと区分されています。歩行者と自転車にも道路スペースを再配分しているのです。また、鉄道駅の地下に巨大な駐輪スペースを設けており、ライデン市の駅には5000台規模の駐輪場がありました。ですから、誰でも自転車で駅まで行って、自転車を駅地下に置いて、そのまま電車に乗る。こういったことが可能になっています。こうしたモデルは多くの都市で検討すべきだろうと思います。

さて、日本の都市に特有の問題点についてです。まず、まったくの部外者の発言であることをご承知おきいただきたいと思います。数年前、フランスの人類学者が日本について書いた本を読みました。大変面白く読んだのですが、それによると、日本では、ヨーロッパの都市とは違うかたちで発展してきた。例えば、空間の感覚がかなり異なっている。つまり、線ではなくエリア(面)で空間をとらえている。これは住所の表示法によっても裏付けられるのではないのでしょうか。ヨーロッパが道路名と番号で表示するのと異なり、地区、ゾーンで住所を表示していますね。ですから、日本の場合、都市が内包するまとまりのある空間、地区が大変重要だったのだらうと思います。しかしながら、戦後、日本のこうした都市空間は、容赦なく破壊されてしまいました。何車線もある広い道路や高架の高速道路などが都市に侵入する現象も珍しくありませんでした。それでも、昔からの都市内の空間を上手に守っている例もかなりあります。ですから、今後の課題は、そのような貴重な空間を都市のほかの部分といかに統合し、その価値を再発見していくかということでしょう。

日本以外の都市でも同じような現象が見受けられます。なかでも、北京の胡同(フートン)は最悪の事例で、徹底的に破壊されました。シンガポールでも古い中華商店街が破壊され始めましたが、観光にはそれを保存した方がよいという主張が通り、完全な破壊は免れ、部分的に修復工事に転換されました。

都市再建の素晴らしい事例はいろいろありますが、横浜市は何をすればよいのでしょうか。先ほど申し上げた都市内の空間を再発見することから始めて、そういう空間を起点にして再構築を考えるべきではないか、と私は思います。と同時に、交通や流通の新しいニーズに応えなくてはなりません。道路に関しては、横浜は十分に成果をあげたと思います。ですから、やはり課題はやはり都市の中の空間を見出すことではないでしょうか。

アムステルダムの取組はたいへん参考になります。アムステルダムでは、波止場周辺地区を素晴らしい住宅地区に再開発しました。水の景観をベースに、穏やかで静かな空間を内包する地区としての再開発でした。オランダらしい特色として自転車専用道も歩行者専用道も整備されています。これは東洋と西洋の伝統を共存させるうえでも、横浜にとって非常に興味深いモデルとなるのではないのでしょうか。これを私の提案とさせていただきます。

(加藤)ありがとうございました。野田副市長、最後にいかがでしょうか。

(野田)今、アムステルダムのお話や、青木先生からは歩けるまちというお話もありまして、やはり横浜において人々が歩いて、そして、さらに立ち止まって、そこで人と人との出会いがあって、交流があって、対話があって、そこからイノベーションというのですか、創造が生み出される、そういうまちでありたいと思っています。

今日はまた、多様性という議論がありました。ピーター・ホール先生も横浜はまさに港町だとおっしゃいましたけれども、多様性に富んだまちです。横浜というのは、本当に150年前には人があまり住んでいなかったのに、そこにわざわざ住みたいと全国から人が集まり、そして世界からいろいろなものを受け入れて、多様性とともな寛容性を発揮しながら成長してきた都市ということで、多様な人材がいる。367万という市民が力を発揮し、そして多様な人々が交わり合う場というものを私たちとしては作り出して、そこから創造的な都市というものを形成していくことができたらと思っています。ありがとうございました。

(加藤)ありがとうございました。創造都市横浜は、今後全市的な展開をはかっていく。また、多様な領域・人・機関とのネットワークにより、取組を推進していく、ということをお願いして、このセッションのまとめとさせていただきます。